慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	復旦大学図書館蔵宋元版解題
Sub Title	Bibliographical notes to the Song and Yuan editions in the Fu dan university library
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1999
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.34 (1999.),p.1-36
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000034-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

復旦大学図書館蔵宋元版解題

例 言

一九五九年刊の復旦大学図書館善本書目(油印本)に宋元

版と著録する本をとりあげた。

に明版と著録されるものは、その旨指摘してある。

中国古籍善本書目(上海古籍出版社 一九八五~九六年)

細な解題がある場合は、それを参照していただくこととして、

阿部隆一著 贈中国訪書志(汲古書院 一九八三年)に詳

その頁数を記入した。

経 部

尾

﨑

康

晦庵先生校正伊川易伝残本(存巻一(首六葉欠)~四)

宋程頤撰 (元) 刊

四冊

新補濃藍色表紙(二七・二×一六・五サン)、金鑲玉装(料紙

高二三・三チン)。

首六葉欠。それで巻一首題はない。巻一の尾題が「晦庵先生

校正伊川易伝上経巻終」。中国古籍善本書目がこれを標題とす

るのに便宜上したがう。巻二・三の首尾題は「周易上経巻第二

易下経巻第四 (隔七格) 程頤伝」、尾題は「周易上経巻第四」。同 (三)(隔七格) 程頤伝 (尾題にこの三字はない)]。第四冊の首題は 「周

書目は八巻本とする。

刻工名は刻されず、ごく一部に耳題。 字双行二六字。版心 小黒口、双黒魚尾、題「易幾」、字数と 左右双辺(一九・四×一二・三ギン)。一一行、二一字・注小

画が特に「貞」字に残るのは、南宋版の覆刻か。「一作居」「一无者字」、音釈の母字などを墨囲陰刻。宋諱欠

蔵印は「曾蔵丁/福保家」(丁福保 一八七四~一九五二)、

「震旦大学/図書館/丁氏文庫」。

学刊 〔元明〕至嘉靖二六年(一五四七)逓修 (玉詩攷 宋王応麟撰 元後至元六年(一三四〇)慶元路儒

海附刻本)

尚存十之七八補版止于嘉靖当邇時所/印可珍也」と墨書されて印行者然以此両種対之凡元刊之葉家獲本已万暦時/修補殆尽屯その下に「家中玉海後所附各首具全其本無国朝補刊蓋猶明季/紙の右半に清の高燮の「葩廬/劫余/長物」の朱印が捺され、香色覆表紙(二六・六×一六・五チン)。やや濃いめの香色表

首に至元六年庚辰四月一日の孫厚孫の序。版心には「玉海叙

いる。

「攷序」とある。れて空行であり、その銜名は第二行に低一一格であり、版心に跋」とある。次に王応麟の序で、第一行の題は二字分が剜去さ

本文首題は「詩攷/(低四格) 韓詩 (墨)」。

補刊年記の入った葉がある。 鼻に字数、下象鼻に刻工名を刻す葉がある。「嘉靖丁已年」の小字双行。版心 白口、双黒魚尾、題は「詩攷(巻一)」、上象左右双辺(二一・六×一二・七+ン)。一〇行、二〇字・注文

本文末に尾題がなく、空一行で王応麟の後序が低三格である。本文末に尾題がなく、空一行で王応麟の後序が低三格である。「高氏吹万/楼のお「復旦大学/図書館蔵」印が二種ある。「高氏吹万/楼のお「復旦大学/図書館蔵」印が二種ある。

冊

明釈文 元泰定四年 (一三二七)刊 [明前期]・正徳六・附釈音周礼註疏四二巻 漢鄭玄註 唐賈公彦疏 唐陸徳

一二年(一五一一・一七)・〔明中後期〕 逓修 二〇冊

元刊(明正徳修)十行本十三経註疏の一。

後補香色表紙(二四・七×一五・三セン)、襯装。

首に賈公彦の周礼正義序、一三葉。

博士弘文館学士臣賈公彦等奉/(同) 勅選/(同) 国子博士兼太子本文巻首「附釈音周礼註疏巻第一/(氐) 朝散大夫行太学

中允贈斉州刺史呉県開国男陸徳明釈文」。

左右双辺(一四×一二・五ヂ)。一〇行、一七字・注文小字

双行二三字。

工名。これは修葉で、耳格もある。

巻三三第三四葉が原刻葉で、版心は白口、題の下方に「泰定

四年」とあり、刻工名が王英玉である。この本より早印の靜嘉

堂文庫蔵本などには致和元年(一三二八)と刻する葉であり、

刊年を泰定四年と限定するのは行過ぎかも知れない。

五一七)の補刊年記、また懷浙胡校、郷林重校、羅林騰の校抄明修葉の多くの上象鼻に正徳六年(一五一一)、一二年(一

疏の明修本は日本(靜嘉堂文庫等)と台湾(中央図書館等)に者名、下象鼻にそれぞれ刻工名を刻する。この十行本十三経註

の年記を剜去している。その点、この本にはそれがなくて、原少からず存在するが、そのほとんどすべてが原刻と補刻の双方

刻は一葉ながら正徳の修工がかなり明らかになる。

期の四期に分けられる。年記は上象鼻にある。われるものを含む)、正徳六年、同一二年、それ以後の明中後補刻刻工はおおよそ明前期(補刊年記がないが正徳修かと思

明前期

王仲友 王良富 令甫 呉景春 施元昇 施肥 范朴

范元昇 陸栄 葉二 葉亦 葉安 葉再 葉再友

葉妥 葉起 葉馬 葉福 貴周令 楊四 楊旺

正徳六年

楊俊

楊会

熊一山

熊山

葵順

謝元林

謝元慶

周元進 呉盛 長方 黄世隆 陳元 葉士大(士大)

熊元貴 (懷浙胡校 郷林重校)

正徳一二年

文才 文旻 文昭 王才 田二 呉一

周二 周三 周士 周十名 周富 尚旦

呉八

元善

細二 熊文 劉立 劉旦 劉京 刘昇 (羅林騰)

明中後期

江貴 江達 余天礼 余成広 余郎 余堅 余漆進王元従 江元富 江元貴 江元寿 江毛 江長深 江盛

陸四 陸記成 陸基 陸其郎 曾堅 曾椿 龔三

後修葉には墨釘の箇所が少くなく、かなりひどい葉がある。

巻一〇第二四葉、巻一四第二葉、巻一六第二三葉などが欠葉

印刷罫紙を挿入する場合がある。

~?)、「厳蔚/私印」(陰)「東門厳/蔚收蔵」(清厳蔚)。 蔵印は、「孫潜/之印」(陰)「潜/夫」(陰)(清孫潜 一六一八

礼経会元四巻 宋葉時撰 〔明〕刊

四冊

後補薄茶色表紙(二五・七×一七チン)、包背装。題簽が第一

冊に残り、「礼経会元」と墨印を捺す。

序(至元二五年・六世孫葉広居撰 墨釘多)、礼経会元目録。至正乙巳(二五年)潘元明序、至正二六年陳基序、竹埜先生

康葉時著」。

贈開府儀同三司南陽郡開国公食邑二千一百戸食実封一百戸謚文

本文卷首「礼教会元第一卷/(一格) 宋竜図閣学士光禄大夫

白口、魚尾がなく、横線をもって四格に分けて、第二格に左右双辺(二〇・七×一三・五チン)。一一行、二四字。版心

「礼記会元第一巻」のような題、三格に丁付。傍線、 傍点を刻

する。

やや大型の「湛園/蔵書」印。清初の姜宸英(一六二八~九

九)の印章か。

尾題「礼経会元第四巻終」。

元至正二六年江浙行中書右丞潘元明刊本の覆刻本とされる。元刊本はお茶の水図書館(成簣堂文庫)、台北の故宮博物院(二部)、アメリカの国会図書館にあるが、中国古籍善本書目には著録を見ない。同書目は復且大蔵本を北京図書館、北京大学図書館、上海図書館、杭州大学図書館、華南師範大学図書館の図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊図書館古籍善本書目には確かにこの刊本が著録されており、刊本の表述を表述といる。

刊 元至正七年(一三四七)福州路儒学・〔明〕逓修礼書一五〇巻 宋陳祥道撰 宋慶元五年(一一九九)跋

後補金切箔散薄青緑色表紙(二六・二×一七・六チン)。

道の礼書序、そして礼書目録。

、大」、慶元五年陳岐跋、林子冲書と続く。進礼書表、陳祥上、文文、司書張伯通/葉鉞、黄誠、陳淦/六斎訓導/陳之。
、大」、慶元五年陳岐跋、林子冲書と続く。進礼書表、陳祥大
、 東京、 京本/福州路儒学正陳 ・ 彬/福州路儒学教授林良琛 ・ 鄭拱辰 ・ 韋泰/福州路儒学正陳 ・ 彬/福州路儒学教授林良琛 ・ 鄭洪彦・ 本書を持ている。

大裘而冕/(呉格) 袞冕 (四格) 驚冕」。本文巻首「礼書巻第一/(呉格) 冕服 (四格) 十二章之服 (四格)

て一〇ほどもあるが、これも元修葉である。 で一〇ほどもあるが、これも元修葉である。 で一〇ほどもあるが、これも元修葉である。

元修にも漫漶のかなり甚しい葉があり、一方、印面の鮮かな

明修葉がある。

尾題は「礼書巻第一百五十終」。その後に至正七年の礼楽書

後序がある。

氏珍蔵」(離)、「国立曁/南大学/書珍蔵」。 蔵印は「韓氏/蔵書」「玉雨/堂印」(清韓泰華)、「延古堂李

中国古籍善本書目(二二一四・五番)も、この本を含めて九中国古籍善本書目(二二一四・五番)も、この本を含めて九中国古籍善本書目(二二一四・五番)も、この本を含めて九中国古籍善本書目(二二一四・五番)も、この本を含めて九中国古籍善本書目(二二一四・五番)も、この本を含めて九中国古籍善本書目(二二一四・五番)も、この本を含めて九中国古籍善本書目(二二一四・五番)も、この本を含めて九中国古籍善本書目(二二一四・五番)も、この本を含めて九中国古籍

(江浙行省) 後至元三年(一三三七)・〔明〕 逓修六書統二〇巻 元楊桓撰 元至大七年(一三〇八)序刊

一六冊

首に至大元年倪堅の六書統序、劉泰の六書統序、楊桓の六書後補香色表紙(二八・七×一九・七キン)、襯装。

統序、そして六書統目録がある。

篆文九~一一字・注文小字双行二三~二四字。 攷集」。左右双辺(二一・七×一五・九チン)。八行、一四字・本文首題は「六書統巻第一/(ffě) 奉直大夫国子司業楊桓

森 栄 蒋 章 屠。 ・ 子 文 中 木 丑 予 余 立 而 仲 余 胡 辛 茅 寿 胡 茂 侃 ど小題。刻工名は、三木 王寧 朱大存 徐愛山 許成 趙秀、ど小題。刻工名は、三木 王寧 朱大存 徐愛山 許成 趙秀、 上泉鼻に大小字数、下象鼻に刻工 版心 線黒口、双黒魚尾、上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工

お中国訪書志四一九頁を参照。 そうであれば西湖書院余謙の修がもう六年降ることになる。な次の「一」が至正の「正」の末画ではないかとも思われるが、月江浙等処儒学提挙余謙補修」の一行がある。上が空格らしく、

明修葉は文字が細目で鮮明である。

「弗山/楽者」、「窒機/書堂」。復旦大学に收められた近人龐元蔵印「呉印/万春」、「涵/公氏」、「寄傲」、「影緑軒/図書印」、

澄の百櫃楼蔵書の一。

又

劉泰・倪堅・揚桓の順に六書統序、六書統目録があって、本

後補金砂子散藍色表紙(三一×一九・九せン)、襯装。

文に入る。

蔵印は「何煒/之印」、「銕崖/一字/童白」、「汪鍇之印」。の上半が欠損したりしている。巻末の余謙の修補記も同じ。七第一・二葉や巻一二第九・一○葉が欠葉となり、巻四第六葉前掲の一六冊本と同版・同修であるが、それより後印で、巻

至正一五年(一三五五)建安陳氏余慶書堂刊〔元〕修前半至第二六葉) 宋毛晃増注 毛居正校勘重増 元増修互註礼部韻略零本(存巻一後半第三三葉以下・巻二

後補金切箔散青色絹表紙(二四・六×一五・八チン)、襯装。

一冊

増」。同版本(未修)が靜嘉堂文庫に存するが、その巻一巻頭(三格) 衢州免解進士毛晃増註/(五格) 男進士 (空) 居正校勘重巻二の首題が「増修互註礼部韻略巻第二 下平声 (鏖鯛)/

とほぼ変りがない。

耳格はない。また巻一の尾題の前に木記はない。八字。版心 小黒口、双黒魚尾、「毛勺一フ」のように題する。左右双辺(二一・二×一三・八チン)。一一行、注小字双行二

復旦大学善本書目も中国古籍善本書目(四九二七番)も元刻をと著録する。元刊本には至正四年余氏勤徳堂刊、同一五年陳本と著録する。元刊本には至正四年余氏勤徳堂刊、同一五年陳本の尾題があり、また刊記を剜去した痕跡を持つ本もある。復旦本は、書影を比較すると、「至正乙未妃僊/余慶書堂刊の各本の氏余慶書堂刊、同年日新書堂刊、同二六年秀岸書堂刊の各本の時嘉堂文庫蔵本と同版に見えるが、この刊記がないわけである。復本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻はないと思われるから、この部分を修補した後印本本文に補刻は、

翁印/方綱」(陰)「方/綱」(翁方綱 一七三三~一八一八)、朱十/彝尊/錫鬯」(朱彝尊 一六二九~一七○九)、「翁」(陰) 蔵印は、「紅豆山荘」(陰)(銭謙益 一五八二~一六六四か)、

「奠/蔵」、「殿中/司馬」(陰)、「朱/游/僊」。観」(方若衡 清道光ころ)、他に「承濂/私印」(陰)「曙/華」、「味経/書屋」(張燮 一七五三~一八〇八か)、「方氏若/衡曾

一元黄公紹原撰 熊忠挙要 〔明前期〕刊(覆元刊本)、東)·一二(一七~二六葉)·二一~二三(二四葉以下)、古今韻音挙要三○巻(存七巻 一・二・五(第八~一八古今韻音挙要三○巻(存七巻 一・二・五(第八~一八

後補紫色表紙(二七×一六・六チン)。

〔明〕修

二冊

「誤学者已経 所属陳告乞行禁約外/收書君子伏幸/藻鑑があり、後者の末の裏面に次の一○行の木記が附刻されている。があり、後者の末の裏面に次の一○行の木記が附刻されている。「「宗昨承 先師架閣黄公在軒先生委/刊古今韻会挙要凡三十巻「宗昨承 先師架閣黄公在軒先生委/刊古今韻会挙要凡三十巻「宗昨承 先師架閣黄公在軒先生委/刊古今韻会挙要凡三十巻「宗昨承 先師架閣黄公在軒先生委/刊古今韻会挙要凡三十巻「宗昨承 先師架閣黄公在軒先生委/刊古今韻会挙要凡三十巻「宗明之、後者の末の東」とは、「本の東」をは、「本の東」とは、「本の東」とは、「本の東」とは、「本の東」とは、「本の東」とは、「本の東」とは、「本の東」をは、「本の東」を表します。「本の東」とは、「本の東」をは、「本の東」とは、「本の東」は、「本の東」は、「本の東」は、「本の東」は、「本の東」は、「本の東」は、「本の東」は、「本の東」は、「本の東」は、「本の東」は、「本の

要凡例と題した次行と次々行に、昭武公紹直翁編輯、昭武熊忠挙要書考と至順二年余謙の序。そして二行に跨って古今韻会挙後 学 陳 窠 謹白」。続いて元統三年孛木魯翀の序韻会

子中挙要とあり、礼部韻略七音三十六母通攷が二二葉も続く。

二二字。版心 小黒口、双黒魚尾、題「韻(匀) 幾巻(フ)る。左右双辺(一九・三×一二・・三チヒン)。八行、注小字双行本文巻首「古今韻会挙要巻之一 甲 」、甲は円で囲まれ

元版の覆刻本で、陳宲の木記も原刊本のままである。

(丁付)」。

史部

五・一一七~一二二) 唐房玄齡等奉勅撰 何超音義~五七・六二~八〇・一〇六~一一一・一一三~一一聖書一三〇巻(存六五巻 巻四~六・二五~四三・四九

後補香色表紙(二八×一九・一ヂ)。

完

浙〕刊 明天順公牘紙印本

一四冊

卷首「帝紀第六 (隔六格) 晋書六」。

線黒口、双黒魚尾、ときに上象鼻に字数、下象鼻に刻工名、左右双辺(二二・二×一六・七チン)。一〇行、二〇字。版心

士中 四郎 江原 李友文 林茂実 孟亨 施亨輔 毗陵彭題は「晋帝紀四 (丁付)」のように刻する。刻工名は、一秀

仁山 楊景 劉子承、他は単字。

巻四九第一六葉が補写。

逆に白く薄いものと、いずれも紙質が異る。白色であるのに、公牘紙は黄味がかったもの、やや厚手のもの、粮米送納関係の公牘紙の葉が七、八ある。他の料紙がほとんど隷常州府宜興県などの年代や地名を記し、大型の公印を捺した 紙背が明天順二・三年(一四五八・九)、応天府江浦県・直

の大量の補刻が、この後これらに対して行われたのであろう。と半欠、下半欠のように大きく破損した葉が少くない。版木の上半欠、下半欠のように大きく破損した葉が少くない。版木の上半欠、下半欠のように大きく破損した葉が少くない。版木の上半欠、下半欠のように大きく破損した葉が少くない。版木の上半欠、下半欠のように大きく破損した葉が少くない。版木の上半欠、下半欠のように大きく破損した葉が少くない。版木の上半欠、下半欠のように大きく破損した葉が少くない。版本の上半欠、下半欠のように対して行われたのであろう。

二七・九キン)。 後補薄藍色表紙(三三×二二・四キン)、金鑲玉装(料紙高さ後補薄藍色表紙(三三×二二・四キン)、金鑲玉装(料紙高さ期・元・明〕至嘉靖一○年逓修〔嘉靖〕印 二○冊 楽書五六巻 唐姚思廉撰 〔南宋前期 浙〕刊〔南宋中

梁書目録、そして本文。巻首「紀第一(隔八格)梁書一/低七格

太亨 二×一七・六ギ)。九行、一八字。版心 散騎常侍姚 (隔) 思廉 化に富む。刻工名は南宋中期修に、王元 王元亨 余敏 仕切るもの、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名を刻する葉など変 であるが、それぞれに単・双魚尾、原刻に似せて横線で五格に 題は「梁書紀一」。原刻葉はなく、すべて南宋中期以後の修葉 彦明 張成 王明 許成 高文 王高 范雙評 陳寿 王徳明 楊栄 高顯 撰」。この葉は元修で、左右双辺(二 朱玉文 陳寿 雇茂 徳裕 任昌 蔡彦 白口、魚尾がなく、 趙良、元修に大用 茂山 繆謙 茂実 芦開三、明 徐瑛 何建

思われる。 嘉靖修葉が鮮明であるから、同二○年ごろの印であろうかと 黄珪

黄琇

黄琢

黄碧

黄瑜

黄镰

劉元

龐知実。

嘉靖修に中后

易堂

胡章

張昆

黄雲

黄琯

黄球

黄珦

国立同済/大学図書/館蔵」。 蔵印は「烣防/之印」、「錦/泉印」、「半/峷」、「一字半王」、

陳書三六巻 南宋中期 唐姚思廉等奉勅撰 元 逓修 〔南宋前期 逝 刊

八冊

近補濃紺色表紙(三二・九×二二・三ヂ)。

七ザン)。九行、一八字。この首葉は南宋中期の修で、版心 「陳書紀一 (丁付)」。 口、単黒魚尾、上象鼻に字数、下象鼻に刻工名があり、 (低七格) 散騎常侍姚 首に陳書目録と叙録。本文首題は「紀第一(隔八格)陳書一/ 思廉 撰」。左右双辺(二二·二×一七· 題は 白

修の少し前の印本であろう。 胡慶十四 中期ごろにかけての、あるいは嘉靖の二十一史成立のための補 すなわちこの本は元代に両度の補修を経、明に入って前期から に、靜嘉堂文庫蔵本に後者の名が現れることで明らかになった。 る。これは台北の中央図書館蔵の三本には前者の名しかないの みえるが、この前半の者は元の第一次修、後半は第二次修であ 修葉も、刻工の残るものは各巻ともほんの数葉ずつにすぎない。 元修刻工には、王全 王百九 任阿伴 李耑 徐愛山 太く加筆されており、刻工名は消えてしまっている。南宋中期 に、版心が横単線で五格に区画されてはいるが、それも薄れて 陳友一 埜慶一 葉禾 原刻葉はごく僅かに残るが、伝八(巻一四)第一一葉のよう 翁子和 単侶 茅文竜 熊道瓊 徐文 蒋蚕、そして王桂 揚十三 騰慶の名が 孫開 任亮

らは靜嘉堂本では南宋前期の原刻葉と南宋中期修葉であったも三二-三、三四-一四・一五・二五、三五-一三・一四。これ一-四・五・一五、二二-三・六、二八-四・五、三〇-六、九葉、九-五、一一-一〇・一一、一七-三、一九-一七、二

眉上に墨筆で校語が書入れられている。補写と同じ明代のも

のが、ほぼ半々である。

のか。

ある。印。ただし目録首に五・七×一・六ヂの印記を切取した跡がいっただし目録首に五・七×一・六ヂの印記を切取した跡が蔵印は判読不明の一印と、「国立同済/大学図書/館蔵書」

消えて「瑱」字を四回、「敦」字を二回、末画を欠いている。南宋中期修の王玩で欠画をしていないのに、この本は刻工名がなお巻三第一〇葉は、百衲本とその底本の靜嘉堂本は刻工が

〔南宋中期・元〕至明嘉靖一〇年逓修 二二二冊周書五〇巻 唐令孤徳棻等奉勅撰 〔南宋前期 浙〕刊

後補藍色表紙(三三・九×二二・四チン)、金鑲玉装(料紙高

さ二九・四キン)。

後周書目録、叙録があって本文。巻首は「紀第一(略)周

れてある。 題は「周書紀一 (丁付)」、上下象尾に字数と刻工名が入れらの首葉は元修、刻工雇恭であるが、版心 線黒口、双黒魚尾、の首葉は元修、刻工雇恭であるが、版心 線黒口、双黒魚尾、書一/(低九格) 令孤徳棻 等撰」と題。左右双辺(二二・二×書

嘉靖後半から万暦初ごろの印本であろう。二十一史本である。前掲の梁書よりやや漫漶が進んでいるから、上象鼻に嘉靖八、九、一○年の補刊記のある葉があり、嘉靖

隋書八五巻 唐魏

實等奉勅撰

元大徳間饒州路儒学刊本・

〔元後期〕覆元大徳饒州路刊本の混配 明正徳一〇:

嘉靖八~一〇年修〔万暦〕印

二冊

香色表紙(三〇・三×二〇・×ーゼン)。

隋書目録。本文首題は「帝紀第一 (隔七格) 隋書一/(低三格) 高

祖上 (隔三格) 特進臣魏 徴 上」。左右双辺 (二一・五×一五・

稀に上象鼻に刊刻を担当した饒州路学などの名、下象鼻に刻工るが、双・三とあり、「隋帝紀一 (丁付)」のように題する。

名がある。路・県・州学名が原刻本にはかなり大量に雕られて

同補刻の趙伯、覆刻本の士中 方亨 王徳明 徐艾山などがみる。刻工名も少くなり、饒州路本の原刻の付一 貴邦 貴和、(饒州路儒学)、番泮(鄱陽郡学)などいくつかが残る程度であいたが、原刻葉は磨滅し、補刻葉にはないから減って、饒学

えるにすぎない。

でいる。 いわゆる元大徳九路儒学刊十史の隋書は、元の後期ごろに覆 が作られたが、明のごく早い時期には両者の版木が南京の 関子監に收められていたらしく、両者から良版を選んで一本と して印行されるようになった。明代では正徳一〇年、嘉靖八・ 一〇年に補修が行われ、同一二年修の葉がただ一葉ある。 層上に朱筆の注記があり、插紙に「当是明人所書」と書かれ でいる。

無党注 〔元〕覆宋慶元五年刊本 至〔明正徳〕逓修五代史記七四卷(欠巻四二~五八) 宋欧陽脩撰 宋徐

副紙に無名氏の識語二則(省略)。 後補薄暗緑色表紙(二六×一五・二チン)、襯装。

五代史記序、五代史記目録。

本文巻首「五代史記第一/梁本紀第一(屬) 欧陽脩撰 徐

無党注」。

であろうか。 左右双辺(一九・七×一二・三+[×])。一〇行、一八字・注文 上象鼻に大小字数、下象鼻に丁付と刻工名を、また耳格を刻す との首葉は明修であるが、明修葉には粗黒口が多い。刻工 とである。版心に「丁亥」の二字が刻された葉は、 にである。版心に「丁亥」の二字が刻された葉は、 に較的早い時期の修とみられ、成化三年(一四六七)第一次修 であろうか。

るべきである。

の、天暦二年(一三二九)の新唐書とほぼ同じころの刊と考えの、天暦二年(一三二九)の新唐書とほぼ同じるの刊と考えの、天暦二年(一三二九)の新唐書とほぼ同じるので記があり、宋慶四・三四・五七・五八末に同じ魯郡曾三異の校記があり、宋慶四・三四・五七・五八末に同じ魯郡曾三異の校記があり、宋慶四・三四・五七・五八末に同じ魯郡曾三異の校記、巻二三・二を用いているが、巻十八に右の宋慶元五年の校記、巻二三・二を開いているが、巻十八に右の宋慶元五年の校記、巻二三・二を開いているが、

蔵書印は「宋本」(州)「生/延州」、「宗建/私印」(陰)「常熟

一八六二~一九三六)。 ○○)、「春芒斎徐乃昌蔵書」「積餘秘笈/識者宝之」(徐乃昌/閣李氏/蔵書」(李荘仲)、「南陵徐乃昌/校勘経籍記」「徐乃/閣李氏/蔵書」(李荘仲)、「南虞呉朝李/荘仲宝蔵」「雲山一葉趙氏/旧山楼/経籍記」「旧山/楼」(趙宗建 一八二八~一九

書、

続いて資治通鑑の総目一葉、司馬光の上進表と列銜、

詔諭詔

元豊・元祐の列銜七葉がある。これらは巻末にも重複して

資治通鑑二九四巻(欠通鑑釈文弁誤) 宋欧陽脩撰

元胡三省音註 〔元〕刊

二00冊

後補暗藍色表紙(二八・五×一七・三チン)、金鑲玉装(料紙

副紙に清の銭塘の呉城の題識。

高さ二五・ニチン)。

五○冊本には附いていないが、この本も明修のない早印本でこの序を具備する元版は多くないが、この三葉の刻工は王昱でこの序を具備する元版は多くないが、この三葉の刻工は王昱でこの序を具備する元版は多くないが、この三葉の刻工は王昱でこの序を具備する元版は多くないが、この三葉の刻工は王昱で三数の興文署新刊資治通鑑序。全三葉のうち首半葉を欠く。

補されたとも考えられる。同印であり、前のものの方が後印であるから、王磐序ともに後あり、本末は巻末に綴じられるはずのもので、その方が本文と

台 胡 三省 音註」。 丞充理検使上護軍賜紫金魚袋臣司馬光奉/勅編集/(低六格) 後 学 天丞充理検使上護軍賜紫金魚袋臣司馬光奉/勅編集/(低六格) 後 学 天本文巻首「資治通鑑第一/(低) 朝散大夫右諫議大夫権御史中

双辺(二一・五×一四キン)。一〇行、二〇字・注文小字双行。 の元刊本の刻工名と一致する。 の元刊本の刻工名と一致する。 の元刊本の刻工名と一致する。 の元刊本の刻工名と一致する。 の元刊本の刻工名と一致する。 の元刊本の刻工名と一致する。 の元刊本の刻工名と一致する。

したことである。上海図書館蔵本の一には、三七巻の巻尾にこのは、胡三省が至元二四年八月二四日から二七日にこの巻に注巻二七二の巻末に「八月壬午起写甲申徹巻」と刻されている

方、司馬光の資治通鑑序、胡三省の新註資治通鑑序はない。

のような字句がある。

通鑑釈文弁誤一二巻を欠く。

馬光の上表、元豊七年十一月の進呈の列銜、奨諭詔書、校定・前述のように「資治通鑑巻第二百九十四」の後に、総目、司

鏤板の列銜、さらに紹興二年両浙東路茶塩司公使庫の刊印の列

銜が附刻されている。

「呉/城」「敦/復」(呉城)、「関中/于氏」、「何印/元錫」(陰)蔵印は「虞山銭曾/遵王蔵書」(銭曾 一六二九~一七〇一)、

「何氏/敬祉」(陰)「銭唐何氏/夢華館/嘉慶甲子/後所得所」

(何元錫 一七六六~一八二九)、「宝田/堂書/画記」「又任

之友」「□/記孫」。

又 (欠通鑑釈文弁誤) 明弘治二・三・正徳九・嘉

二八〇冊

靖一・二〇・二一年逓修

とは、「一・五×一六・五+ン)。 後補藍色表紙(二一・五×一六・五+ン)。

胡三省の新註資治通鑑序、首半葉補写。司馬光と王磐の序は

ない

嘉靖二十年、嘉靖二十一年等の補刊年記があり、国子監刊、監版心 上象鼻に弘治二年、弘治三年、正徳九年、嘉靖元年、

生某などの文字を添える。

の列銜、そして紹興二・三年の両浙東路茶塩司の印造の列銜が奨論詔書、元豊八年の重行校定と元祐元年の杭州鏤板の一三名巻末に総目、司馬光の上進表、検閲文字・編集の五名の列銜、

蔵印は「芳輯/読」(閇) (馮芳輯)、「夢宝斎/書画蔵」(陰)

附刻されている。

「康/侯」、「葉/徳輝」「郋/園」「観古/堂」(葉徳輝 一八六

四~一九二七)「定侯/所蔵」「拾経楼」(葉啓勲)「葉啓/潘蔵

(葉啓潘) 等。

宋史全文続資治通鑑三六巻 增入名儒講義続資治通鑑宋

に終り、後者がその後の度宗・少帝の代を扱う。本によっては前者は目録では両宋全代の編年史であるが、実は南宋の理宗 季朝事実二巻 元欠名者撰 (元 建安)刊 三二冊

くは建安の書肆がそれを抄録したものであろう。れたものが附刻されて、李熹の撰と仮託されているが、おそら首に続資治通鑑または宋史全文資治通鑑の李熹の序文が附綴さ

後補暗藍色表紙(二七・二×一六・九チン)、金鑲玉装(紙高

二三・七チン)。

共之誠爲有用/之書回視它本大有逕庭具眼者必蒙賞音幸鑑」。の序を宛うつもりであったのか。次の一葉の表裏の宋朝玉裔との序を宛うつもりであったのか。次の一葉の表裏の宋朝玉裔とある。「宋史通鑑一書見刊行者節略太甚諸者不無遺/恨焉本堂ある。「宋史通鑑一書見刊行者節略太甚諸者不無遺/恨焉本堂ある。「宋史通鑑一書見刊行者節略太甚諸者不無遺/恨焉本堂を得善本乃公所編者前宋巳盛行/於世今再綉諸梓与天下士大夫今得善本乃公所編者前宋巳盛行/於世今再綉諸梓与天下士大夫の序を宛うつもりであったのか。次の一葉の表裏の宋朝玉裔と

ど、実体にそぐわない。いて「増入名儒」を冠するもの、尾に「長編」を附するものないい。首尾題は特に後半において一致せず、「宋史全文」を省ない。首尾題は「宋史全文続資治通鑑巻之一」で、撰者名を記さ

中曰、朱文公、曾鞏政要、富弼講義などと墨囲陰刻してこれら本文は年代(干支)を墨囲陰刻して始り、注文は低一格で呂

ようにいうが、巻三六は理宗で終っている。宋儒の評語を載せる。目録には度宗、少帝と南宋末代をも含む

巻三〇末に木記の匡郭(左右双辺一四・八×三・七チン)が

尾題「名儒講義宋資治通鑑巻之三十六」。

刻されるが、文字は削除されている。

版式等は宋史全文続資治通鑑にほぼ同じ。欠く。度宗紀の尾題は「増入名儒講義続資治通鑑宋度宗事実」。巻次は記さないが度宗と少帝の二巻に別れる。少帝記の尾題を続いて「増入名儒講義続資治通鑑宋季朝事実」二巻がある。

√蔵書」(季振宜(一六三○~?)、「鄢氏/士徴」、「宋印/育蔵書印「季印/振宜」「滄/葦」「御史/之章」(陰)「季振宜

少帝第一九葉裏以下。

徳」(陰)「公/威」「宋/公威」(隆)、「菖敬斎」「金門/口客」

(陰)。

通鑑紀事本末四二巻 宋袁樞撰 宋宝祐五年(一二五七)

湖州趙与篱刊 完 嘉興府学]・明正徳一二年・[嘉靖

初〕逓修 八四冊

修葉である。

熙元年揚万里の通鑑紀事本末叙。通鑑紀事本末総目。 後補銀砂子散薄朱色表紙(三一・一×二三・四チン)、襯装。 元延祐六年陳良弼の補刊序、宋宝祐五年趙与篡の刊序、 宋淳

本文巻首「通鑑紀事本末巻第一/(二格)三家分晋」。 撰者の

名は記さない。

弦眩縣朗 宋室の一員のためであろう、避諱欠筆が相当に厳格である。 によって上象鼻に字数、下象鼻に刻工名を刻す。 字双行。版心 小字双行で桓を「御諱」と、構を「御名」または「御名」と、 眘 んど欠かないが、 頊勗 左右双辺(二五・五×一九・一キン)。一〇行、一九字、 桓峘瑗完 構媾敦 敬警驚 白口、単黒魚尾、 弘泓殷匡胤 巻二十七第五一葉裏第二行に例がある。また 眘愼 惇敦勝 旲頒 題「通鑑紀事本末巻幾」、 恒絙暅 廓 の各字。郭廓はほと 禎貞偵徴懲 刊者の趙氏が 署樹豎 注小 玄 葉

を らの避諱を踏襲したものと考えられる。 の宝祐刊本は淳熙刊本を底本として刊刻され、基本的にはこれ らはほぼ淳熙二年(一一七五)厳州郡学刊本にもあるから、こ 「御名」「名」とする場合があり、「御名」はかなり多い。これ

尾題 「通鑑紀事本末第四十二」。明嘉靖の比較的早い ·時期

2 卜 仲 王興宗 茹鎭 林茂 余和 刻工は左表のように原刻と二期の補刻に分けられよう。 10徐侁 4方得時 馬良 王燁 余甫 11張栄 5史祖 王介 徐侃 呉炎 陳必達 徐松 沈杞 何文 王亨 12黄佑 何文成 王亨祖 徐拱 沈祖 13虞桐 8周松 王春 徐珙 何祖 虞源 周崇 王興 翁期 何豫

2丁壁 8 林嘉 鐘季升 徐洪 3 中明 21顧祺 林嘉茂 徐嵩 4仁端 金永 徐楠 9范刁 11張成 王桂 得春 范仲 王燁 5史京 范仲実 梁仁甫 12彭崇得 以上原刻 7.10徐元 6伍琇

賈端

15劉共

劉孚

劉隠

蔡成

16 **銭**玕

17濮冲

(以上元末明初補刻)

曹戬

婺徐

13董継思

蔡文

蔡虎

蔡茂

13楊東浙 15劉潤 19羅嗣秀 (以上明補刻6朱銘 7何愷 均佐 汪鐶 8周春富 11陳添孫 陸位

張井/之印」(陰)「畏堂/張氏/收蔵」(陰)(張井)、「張印/口蔵印は少くないが、その所有者があまりよくわからない。

十/以後所/得書画」(王体仁)、「能尋/孔顔/楽処」、「九華煥」(陰)「鼎/文」、「杭州王氏九峰/旧廬蔵/書之章」「綬珊六

/之」「賜礼堂」「雲/林子」「恃徳/者昌」「烟/客」「□□//之印」「九/華」(陰)、「二□中」「西/涯」「賓/之」(陰)「賓

居」(隆)、

通鑑続編二四巻 元陳 桱撰 元至正二五年 (一三六五)

松江顧逖刊〔明〕修

二冊

後補黄土色表紙(三〇・八×一七・五チン)。双郭の明印題簽

「通鑑続編」(外郭一六・七×四チン)。

通鑑続編叙、至正一〇年陳桱の序、姜漸の通鑑続編序。通鑑続至正二一年周伯琦序、至正一八年陳基序、至正二二年張紳の

編目録。

本文巻首「通鑑続編巻第一(隔四格)陳枰」。

象鼻にときに刻工名、補刻葉には「訓導銭紳/李順刊」のよう双魚尾、題「通鑑続編巻幾」、上象鼻にごく稀に大小字数、下双行。版心 線黒口、明修葉はときに粗黒口、単黒魚尾、稀に左右双辺(二一・三×一四・一ヂン)。九行、二二字、注文小字

以降の印であろう。は補刻葉である。補刻葉にも破損の進んだ葉があり、明も中期刻葉の漫漶はかなり進んでおり、墨釘の箇所も少くなく、九割を、上海図書館蔵の無修本もかなり漫滅していたが、この本は原

に刻される葉もある。眉上に干支の紀年を横書きする。

しては、教諭、訓導の陳道曾、銭如墳がいる。 孟得 徐海 張思温 陳海 章敬 蘇良 馮敬等の名がみえ、校者とど明修である。毛達 王盛 呂瑧 何漢 呉海 李順 有誠 徐進 徐刻工は原刻の王叔敬の名がわずかに見られるが、他はほとん

尾題は巻二四になく「通鑑続編巻第二十三」。

聖朝混一方輿勝覧三巻(欠尾) 元劉応挙編 〔明〕刊

八冊

「〒混一方/輿勝覧」と篆書。右方に「元槧本」と墨書する。後補銀砂子散黄土色表紙(二四・八×一五チン)、襯装。外題

本文巻首

「聖朝混一方輿勝覧巻上」、

同じく跨行大字。次行

目中信乎其爲勝覧矣」。
日中信乎其爲勝覧矣」。
日中信乎其爲勝覧矣」。
日中信乎其爲勝覧矣」。
日中信乎其爲勝覧矣」。
日中信乎其爲勝覧矣」。

文字があるようにみえるが、あるいは刊年か。 方后乙集」。上象鼻の上半がほとんど墨で塗りつぶされ、下に 正統刊本より匡郭が一廻り大きく、字数も六字増えている。版 正統刊本より匡郭が一廻り大きく、字数も六字増えている。版

仲/魚/図/像

(肖像)」(印)(陳鱣)。

るようである。 後半の瓜州までを收録し、嶺北等処行中書省の記事を欠いている。 各巻末とも尾題はないが、巻下の本文は甘粛等処行中書省の

鑒我」(陰)(陳鱣 一七五三~一八一七)、「銭江何/氏夢華/(鮑廷博 一七二八~一八一四)、「得此書費/辛苦後之/人其振宜 一六三○~?)、「歙西長/塘鮑氏/知不足斎/蔵書印」(季蔵印は「毛」「晋」「子/晋」(毛晋 一五九九~一六五九)、

得」(趙宗建 一八二八~一九〇〇)、「霞秀/景飛/之室」、 館蔵」(何元錫 一七六六~一八二九)、「庚申以/後冶侯/所

一力。

りあげた。 他に著録されるところがないから、それを明らかにするため採 の台北の国立中央図書館北平蔵等の明正統元年刊本とは別版で、 この本は明らかに明刊であるが、中国訪書志著録 (二四九頁)

東莱校正晋書詳節三〇巻 題宋呂祖謙編 完 建) 刊

後補銀砂子散紺色表紙(二一・八×一三・九チン)、金鑲玉装

紙高一八・八サン)。 東莱先生晋書詳節目録。世系図および地図を欠く。

本文首題「東莱校正晋書詳節巻之一」。

左右双辺(一五・八×一〇・五ザ)、一四行、二四字。版心

線黒口、双黒魚尾、題「晋節幾」。眉上に標題を行二字で、

また耳題を刻する。玄 匡 恒 貞 楨 徴 勗 桓 愼 敦 等の文字

に欠画がある。南宋末刊本の覆刻であろう。

台北の国立故宮博物院蔵の十史叢刻本(中国訪書志二四六頁)

の晋書の書影と対比すると、まったく同版である。巻頭を除き、

刷りは比較的鮮明。

巻一四第五・七・九・一〇葉、巻二二第一一葉、巻二三第一

葉は補写。

尾題「東莱校正晋書詳節巻之二十」。

蔵印は「亭林/之印」(顧炎武 一六一三~八二)、「商邱宋

氏/收蔵善本」「臣/犖」(陰)(宋犖 一六三四~一七一三)、

「知不足/斎鮑以/文蔵書」(鮑廷博 一七二八~一八一四)、

「劉氏喜/海字燕/庭蔵書」(劉喜海 一七九三~一八五二)、

「周氏/図書」、「延古堂李氏現蔵」 (産)、「国立同済/大学蔵書」。

一〇冊

顧炎武のものは僞印であるという。

東莱先生校正隋書詳節二〇巻 題宋呂祖謙編 完 建

刊

五冊

後補香色表紙(二三・七×一五・一サド)、襯装。

東莱先生校正隋書詳節目録。隋世系図と隋地理之図が各半葉。 「東莱先生校正隋書巻之一/(馬) 帝紀 (隔八格) 唐特進魏

徴 撰」。

左右双辺(一六×一〇・五ギ)。一四行、二四字。版心 線

黒口、 題を刻する。貞徴 双黒魚尾、題「隋幾」、眉上に標注を行二字で、また耳 恒 勗 愼 敦 等の字に欠画が残っている。

晋書詳節と同じく台北の故宮博物院本と同版。

東莱先生校正隋書詳節巻之二十」の尾題

蔵印 「拝経/楼呉氏/蔵書」(呉騫 一七八三~一八一三)、

|漱六執/之芳潤」(陰)(袁芳瑛

道光二五年進士)、「独山莫/

氏蔵書」(莫棠)、「劉印/承幹」「翰/怡」(劉承幹 ~ | 九六三)、「紫芝/閣」、「茹経/居士」。 一八八一

又 (存首七巻)

₩

という。

表紙、「宋刻隋書詳節共分二冊」と外題を墨書、かなり古く清 後補香色覆表紙(二一・四×一三・九ザ)。後補薄焦茶色元

初ごろのものか。

之十/経籍志」のところで切断して以下を削除し、「東莱先生 で首尾完好のようにみせかけたものである。 校正隋書詳節目録」の尾題だけを切ってきて繋げてある。七巻 隋世系之図、 隋地理之図。東莱先生校正隋書詳節目録、 一巻

読有用書斎金山守閣/両後人韓徳均銭潤之夫婦之印」(韓徳均・ 蔵印「甲子丙寅韓徳均銭潤文/夫婦両度携書避難記」「松江

銭潤之)、甲子は同治三年 (一八六四)か。

文献通考三四八巻 元馬端臨撰 元泰定元年(一三二四

西湖書院刊 後至元五年(一三三九)余謙・明成化

〇・一一(一四七四・五)・弘治一・二・一二・一八

(一四八八・八九・九九・一五〇五) 逓修 八〇冊

香色表紙(三一×二〇・三チン)、一部襯装。

院での補修のことを記す。次に泰定元年江浙省彫口于西湖書院 空一行で、至元五年江浙等処儒学提挙余謙叙があって、西湖書 馬端臨の自序は補写。文献通考目録、その末葉の尾題の次に

本文巻首「文献通考巻之一/(低二三格) 鄱 陽 馬 端臨 貴与

著一。

一八年のものがある。 がある。さらに標記のように、成化一一、弘治元・二・一二・ は、この上象鼻に「成化十年/国子監重刊」のように補刊年記 小字双行。この首葉は明修で、版心 「文献通考巻一」。原刻葉は線黒口である。成化、弘治の補刻葉 左右双辺(二五・八×一八・三ザ)。一三行、二六字・注文 粗黒口、 双黒魚尾、題

補写葉が巻三五第一三葉、巻六三第六葉。欠葉が巻七四第一

葉、巻七九第一~四葉。

刻工名を三期に分けて表示する。

2义本 3大用 子仁 子明 子堅 小唐三 4仁甫

元吉 文甫 王六 王森 王富二 王徳明 王続卿

·寿 5以方 可原 正之 用之 6仲亨 朱明

何慶 君仲 李寿 李璋 秀卿

ヶ何庚

何建

阮寧

8周之

9茅公甫 10徐徳

翁子和

10唐三

11張二

張四

張生

張用

張顯

黄四崇

周明 周福二 周顯 林茂実 青之

曹新 陳子仁 陳敬 12華甫 雇恭

13楊三 瑞卿 詹仲亨 寿卿 15鄭国

(以上原刻)

3山番 4王子仁 王正 5世通 可川 古之 古賢

10倪平山 徐明 徐阿狗 高顯祖 11張成 張君用 章才6朱長二,何庚 沈子英8周東山 杭宗 9彦昭 胡君仲

章宇 陳士通 陳栄 陳徳全 12屠明道 13楊景仁 虞保

14趙秀 趙徳明15鄭埜 17繆士元 繆太亨 繆謙

(以上元修)

汝敬 江子名 危寿 宗文 范双評

巴友

丘安

張名遠 張広祖 蔡幹

(以上明初修)

うりにおきりにつきりこう

元代の刻工名は元刊本や宋刊本の元修葉に多数知られるが、

字様と版面の状況から、原刻と元修とに分けたが、やや疑問も右の刻工の活動年代を証明する資料は意外に乏しい。ここでは

残る。大徳四年(一三〇六)太医院刊の大徳重校聖済総録にこ

こで補刻とみた鄭埜の名があり、原刻とみた林茂実 王徳明 以

方 寿卿 らは後至元末江浙行省刊至正二年(一三四二)西湖書

院刊の国朝文類、後至元六年(一三四〇)慶元路儒学刊至正一

い。明初修刻工というのは、洪武中間の欧陽文忠公集や韻府羣一年修の玉海に出てくるから、補刻の方に移すべきかも知れな

玉、これと多数の刻工が共通する唐文粋、南史、北史、遼史、

金史、古史などに頻出する名である。

尾題「文献通考第三百四十八巻終」。

蔵印「葉氏/菉竹堂/蔵書」(円) (葉盛)一四二〇~七四)、

|光昫/之章」「別下/斎印」「別下斎蔵書」(蒋光煦 | 一八一三

~六○)、「国立同済/大学図書/館蔵書」。

両漢詔令二三巻 西漢詔令一二巻(巻二・七補写) 宋

林處撰 東漢詔令一一巻 宋楼昉撰 元至正九年

(一三四九) 蘇天爵刊

九冊

後補金砂子散暗藍色表紙(二八・四×一七・八セン)、金鑲玉

(料紙高さ二四・八ナン)。

大観三年の程倶の序、改丁せずに続けて林虙の序と蒋瑎の 咨唆の両漢詔令総論。 両漢詔令目録。 本文巻首は

一四漢詔令卷第一 泉山大山比類不録。 一 八五漢詔令卷第一 绿如紀載建元元年秋七月 四漢詔令卷第一 凡直叙事実不載辞令者不

双行。版心 双辺(一八・八×一三・六ギ)。一〇行、一八字・注文小字 線黒口 双黒魚尾、題「西漢幾」あるいは「詔令

工名は 李友文 何秀父 秀父 占仲亨 謝成、 幾」。ときに上象鼻に大小字数、下象鼻に刻工名を刻する。 東漢に王古賢、 あ 刻

とは単字が約二〇。

西漢詔令の末に程倶の西漢詔令後序、 東漢詔令の末に嘉定一

青及び朱筆で句点が打たれている。

五年楼昉の東漢詔令後序がある。

北京図書館本も四部のうち三部は欠(一も補写ではないか)、 上海図書館本(三部)、北京大学図書館本も欠巻または補写で、 西漢詔令巻二はわずか六行で、補写。早く失われたらしく、

> 巻一一第一三葉、巻一二第一一~一三葉、東漢巻一第二一葉: 明抄本も欠けている。ほかに巻七全五葉、巻六第二一~三〇葉

同後序第二葉が補写されている。このうち巻七、一一、一二の

欠葉は上海図書館本でも同じ場合があり、 明代のあまり遅くな

いころから失われたかと思わせる。

蔵印「曽蔵李/鹿山処」(李馥 一六六二~一七四五)、 輸輸

林何/須門人」、「口/鈞」「曉霞」。

新刊增入諸儒議論杜氏通典詳節四二巻 不著撰人 (明

後補香色表紙(二七・五×ー七・ニヂ)。

新刊增入諸儒議論姓氏。 いない。杜氏通典篇第題旨 に「至元丙戌/重新繍梓」の二行があるが、匡郭に囲まれては 典詳節図譜。新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節綱目 新刊增入諸儒議論杜氏通典詳節序。新刊増入諸儒議論杜氏通 (新唐書杜佑伝の抜萃と杜佑の自序)。 (目録)、末

本文卷首「新刊増入諸儒議論杜氏通典詳節卷一」。

卷三八以

降は「杜氏」の二字を脱する。

双辺(二二・二×一四・七ザ)。 一一行、二三字・注文小字

六冊

双行。版心 小黒口、双黒魚尾、題「杜氏通典詳節巻幾」、下 象鼻に刻工名。 徐旺 徐昭 刻工は、王元 馬圭 馬玺 王英 張中 王海 張巳 王銮 張正 李進 張英 李福

張政 張勝 張実 張鐸 郭従礼 許鳳 楊忠 等。

尾題「新刊増入諸儒議論通典詳節巻四十二」。 巻二七第一八葉、巻三七第第九葉、巻三九第一七葉が補写。

学/図書館/丁氏文庫」(丁福保 一八七四~一九五二)。 蔵印は「夢/陳」「丁厓/□山」、「曽蔵丁/福保家」「震旦大

みないとそれとは確言できない。この版は元末明初刊本より匡 の存在はまだ確かめられておらず、北京の他の二本も実査して る。この覆刻本は日本や台湾にもあるのに対して、元至元刊本 やはり「至元丙戊」の刊記があるものの元末明初の覆刻本であ 五年(一一九四)建安擇善堂刊本がその嘆矢であろう。存巻一 北京市文物局(有欠)に蔵すると著録されるが、北京大学本は 籍善本書目には北京大学図書館(有欠)、中共中央党校図書館、 れに次ぐのが元の至元丙戊(二三・一二八六)刊本で、中国古 儒二一人の議論を挿入した科挙受験の参考書と思われ、宋紹熙 ~一八 北京図書館蔵・巻二四~二七 上海図書館旧蔵)。そ 増入諸儒議論通典詳節は、通典二○○巻を大幅に刪略し、宋

> なく、 る。 郭が一回り大きく、行格も異り、字様も明の前記を遡るもので うには思えない。 暦刊本に各五名ほどが共通するが、字様からは嘉靖まで降るよ 八年刊本とも首題の冠称や行格を異にし、それより後の刊であ 一九九八年)に照すと、成化・正徳の刊本に各一名、嘉靖万 前掲の刻工を李国慶の明代刻工姓名索引(上海古籍出版社 刊記だけを踏襲したものである。 北京図書館蔵の明洪武

司馬温公経進稽古録二〇巻(欠巻一四) 宋司馬光撰

〔明前期〕刊

紙が添えられる。 後補黄色表紙(二五・三×一七・四チン)、襯装。濃橙色の副

司馬光の進稽古録表、朱文公与鄭知院書・朱文公語録中語

司馬温公経進稽古録目録が続く。 本文卷首「司馬温公経進稽古録卷之一/(三格)伏羲氏」。

版心 双辺 (二二×一四サーン)。 一〇行、二一字・注文小字双行。 粗黒口、双黒魚尾、題はなく、丁付は数巻ずつ一冊を通

前半に朱句点が打たれる。

す。

五冊

尾題 「司馬温公経進稽古録巻之二十」。

庫」(丁福保 一八七四~一九五二)。 (方功恵 ?~一八九九)、「士/蔚」「読荘/老重/増」「宝倹 功恵/蔵書印」「巴陵方民/碧林琅館/珍蔵秘笈」「方家/書庫」 ○)、「陳印/経儒」(陰) (陳継儒 /堂図/書記」「曽蔵丁/福保家」「震旦大学/図書館/丁氏文 〇行二一字白口四周双辺とこの本と行格を同じくする。 刊記がないが、北京図書館に弘治一四年楊明璋刊本があって、 蔵書印「元本」(附)、「墨林/珍賞」(項元汴 一五二五~九 一五八八~一六三九)、「方

漢藝文志攷証四巻 宋王応麟撰 元後至元六年(一三四

〇) 慶元路儒学刊 靖二六年(一五四七)逓修 元至正一一年 (一三五一) ~明嘉 (玉海附刻本) 二冊

刊」一嘉靖丁巳」などの補刊年記を刻する。 数、下象鼻に刻工名。補刻葉には上象鼻に「正徳元(二)年補 小字双行。版心 左右双辺(二六・七×一二・九ヂ)。一〇行、二〇字・注文 本文巻首「漢藝文志攷証巻一/ (低九格) 浚儀王応麟佰厚甫」。 後補藍色表紙(二五・六×一六・五ザ)、襯装。 白口、双黒魚尾、題「攷巻幾」、上象鼻に字 原刻の刻工名は漫

滅して単字のほかは読めない

欠葉巻一第六葉。

尾題「漢藝文志攷證卷四」。

蔵印 「積学斎徐乃昌蔵書」(徐乃昌 一八六八~一九六六)。

子 部

中説一〇巻 宋阮逸注

〔明前期〕刊

<u>一</u> 删

後補濃紺色絹表紙(二四・五×一六ザン)、襯装。

文中子中説序、尾に篇目を附する。河汾肄子王壬の文中子纂

事 (世系二葉、年表一葉)。

本文巻首「中説巻第一/王道篇 (隔 | 五格) 阮 逸 註。

双行。版心 双辺(一九・五×一二・六ザ)。一二行、二六字・注文小字 粗黒口、双黒魚尾、題「中説幾巻」。

朱筆句点。

/誤字極多而待校正也/寉俼記(印)(「松/年」 (陰))」 (寉は 「中説巻之十」の尾題の次に、「光孝寺斎宿日得此本草草読過

鶴)と「道光丙申冬琴川蒋宝齢読」の墨書がある。

蔵書印「小瑯嬛/福地/張氏蔵」(陰)「味経/書屋」(張燮

一七五二~一八〇八)、「曽蔵/張蓉/鏡家」「張芙川/鑒蔵」

首冊のものから順に列挙すると、「師氏/珍蔵」(陰)「師氏守/(喬松年 一八一四~七五)、他は所蔵者名を特定できないから(陰)(燮孫蓉鏡)、「徐水喬/氏寉儕/蔵書印」「喬寉儕/蔵書記」

玉守章/昆仲印」、「修庵奚/氏珍賞」、「椿宣/書屋/蔵書」、

「象尚/愚公」、「臣映/奎印」(陰)「子/耀」、「倚青/閣」(陰)、

盋山書影所掲二本のうちの一と同版で、中国古籍善本書目は

明刻本としている。

慈溪黄氏日抄分類九七卷 慈溪黄氏日抄分類古今紀要一

九巻 宋黄震撰 〔明〕刊 明正徳一三年(一五一八)

龔氏明実堂修印

三〇冊

後補香色覆表紙(二七・六×一六チン)。後補乳白色元表紙

元至元三年沈陸の黄氏日抄序、その末に双郭双行(外郭一二・外題・目録外題を墨書。

八×五・二チン)の木記があるが、文字が刻されていない。 次

に慈溪黄氏日抄分類目録。

本文巻首「慈溪黄氏日抄分類目巻之一/(低二三格) 慈溪黄

震 東発 編輯」。

点傍線を刻。 「論語二巻」のような小題を刻する。粗黒口の修葉がある。傍黒口、双黒魚尾、上象鼻の上半に「黄氏日抄」の大題、中逢に黒口、双黒魚尾、上象鼻の上半に「黄氏日抄」の大題、中逢に水辺(二四・一×一二・四キン)。一四行、二六字。版心 線

九巻源無文字」とあって、原欠の意を示す。第二六冊尾に「八十一巻原官板無文字」、二七冊尾に「八十

首の序末のほかに巻二二末でも、木記の文字が剜去されており、ともに原刻葉である。一方、巻五六の本文末、尾題の前に、「正徳戊寅歳秋九月/菊節龔氏明実堂栞」の双行木記があり、これは補刻葉である。原刻葉は少しく漫滅しているのに対し、「正徳戊寅歳秋九月/菊節龔氏明実堂栞」の双行木記があり、「正徳戊寅歳秋九月/菊節龔氏明実堂栞」の双行木記があり、「正徳戊寅歳秋九月/南節龔氏明実堂社」の双行木記があり、「正徳戊寅歳秋九月/南節龔氏明実堂であったかどうか。中国削除したのであろうが、これも明実堂であったかどうか。中国削除したのであろうが、これも明実堂であったかどうか。中国削除したのであろうが、これも明実堂であったかどうか。中国削除したのであろうが、これも明実堂であったかどうか。中国制除したのであろうが、これも明実堂であったかどうか。中国制除したのである。

溪黄氏日抄分類古今紀要巻之一/(低一〇格) 慈 溪 黄 震第三〇冊は慈溪黄氏日抄分類古今紀要目録のあと、首題「慈

東 発」。単に「古今紀要」と題する巻もある。

蔵印は「魏氏温雲/蔵書画印」と「仇顛/之印」。

桯史残本(存巻一~四) 宋岳珂撰 〔宋嘉定 嘉興〕

刊〔元明〕逓修

二冊

後補香色表紙(二六・九×一七・三チビ)、襯装。

桯史一二巻の首四巻の残本。岳珂の自序や目録を欠き、「程

史巻第一十三則/(低七格) 相 台 岳

珂」の本文首題に始る。

ヂン)。九行、二七字。版心(粗黒口、双黒魚尾、題「桯史巻幾」。黒口であるが、巻一首葉は明修で、左右双辺(二〇×一四・九果の原刻葉の版心は白口、単黒魚尾、元修葉は白口または粗

があり、粗黒口の元修に沈良、粗黒口の明修に昌がある。原刻とみられる白口、左右双辺の巻一第一三葉には昌の刻工名

巻一第二~四葉は欠。巻一第一五・一六、巻三第一〇・一五・

一六、巻四第四・五・一三・一四葉は補写。

中国訪書志七二六頁参照。

後補薄藍色表紙(二八・四×一八ゼン)、襯装(料紙高さ二局 零巻(存巻九第二~四葉) 〔明前期〕刊 一冊

六・九せン)。

首葉を欠き、首題のある葉はない。

双辺 (二〇・八×一四ヂ)。一〇行、二〇字。版心 粗黒口、

双黒魚尾、題「桯巻巻九」。

状元雙筆の残三行、堯舜二字、西隆南冦、鼈渡語の題だけを

收める。

四部叢刊本と同版。

姓氏急就篇二巻

宋王応麟撰 元後至元三年(一三三七)

慶元路儒学刊 元至正元年修 (玉海附刻本) 二冊

本文首題「姓氏急就篇上/(低九格) 浚儀王応麟伯厚甫」。後補濃藍色表紙(三一・九×一九・二+ン)、襯装。

左右双辺(二一・九×一二・七ヂ)。注は低一格、小字双行

二一字。版心 白口、双黒魚尾、題「姓氏一 (三)」、上象鼻に

字数、下象鼻に刻工名。耳格に「姓氏」と刻する。

刻工名は、士良 任子敬 仲裕 克明 胡泰之 徳中 徳章 寿卿

等。

この二巻に明修は認められない。

尾題「姓氏急就篇巻下終」。

姓氏急就篇は単行の場合は史部伝記類に属するのであろうが、こ

こでは当館目録に従った。

詩学集成押韻淵海二〇巻 元厳毅編 〔明前期〕 覆元後

至元六年梅軒蔡氏刊本

二二・八セン)。 後補濃紫色表紙(二五×一五・七セン)、金鑲玉装(料紙高さ

至元庚辰張復の序、増修詩学集成押韻淵海凡例、増修詩学集

成押韻淵海目録は補写。

本文巻首「詩学集成押韻淵海巻之一 上平声(鏖朝)/(低六格)

建安後学厳毅子仁編輯」。

双行二八字前後。版心 小黒口、双黒魚尾、題「匀海幾 (フ)」。 双辺(一八・六×一二ギ)。一二行、二一字前後・注文小字

文にすぐ続いてあり、ここで料紙が一直線に裁断されている。 尾題「新編詩学集成押韻淵海巻之二十 下巻終 (墨)」は本

明の刊記があったかは不明

陰)「五福/五代/堂宝」「八徴/耄念/之宝」「太上/皇帝/ 蔵印「乾隆/御覧/之宝」 (酉)「天禄/琳琅」「天禄/継鑑

之宝」(乾隆 在位一七三六~九五)、「□/生」(陰)「楊□□/

関記」。

続高僧伝三一巻 唐釈道宣撰 〔明洪武五~三二年(一

三七二~九八)金陵蒋山寺刊南蔵本)

四冊

後補紺色表紙(三三・六×三〇・六チン)、包背装。

「続高僧伝序」「唐釈道宣撰」、この中間に「轂一」の千字文

号が入り、その上に「此号七巻」、すなわち轂が七巻あること

を示す。

本文巻首「続高僧伝巻第一」。次行に「訳経篇初 本伝六人

附見二十七人」とある。

天地 二四・三ヂを隔てて横線を引き、無界、一紙に三〇

行、行一七字。五折するように六行ごとにわずかな空行がある。

り、「轂一 一」のように千字文号と丁付を刻する。 半葉約二 版心は一紙ごとに交互に第六~七行、第一二~一三行の間にあ

九せ、で綴じ、右の枠の巾広のところに刻工名を陰刻する。首

尾の天地の余白のところに花、炎、十字などの模様を散らす。 尾題の後に音釈を掲げ、もう一度、尾題を掲げる。千字文号は

刻工名は次の有宋高僧伝のものを含めて、ほぼ次のようなも

轂のあと振 世。

范普 計阿用	段世初 段世昌	芦虎 芦普賢	宗善 易中	周紹俚 周景	良仔良記	李謙 李賢		李記李南一	孫	孫	孫	孫 李 肖 呉 羊 南 荷 寺 生	孫	李 李 肖 呉 羊 朱 永 南 苟 寺 玄 豪 文 安 一 伸 生	李 李 肖 呉 羊 朱 永 占 南 苟 寺 玄 豪 文 安 羊 一 伸 生 仔	孫 貴 李 善 肖 呉 羊 朱 永 占 王黒 帝 帝 寺 玄 豪 伊 任	孫 貴 辰 李 肖 呉 辛 永 占 王 南 寺 去 安 子 子 子 子 市 生 子 </th <th>係 貴 辰 成 李 李 肖 呉 羊 朱 永 占 王 安 东南 苟 寺 玄 豪 文 安 羊 黒 安 和 中 生 仔 仔</th>	係 貴 辰 成 李 李 肖 呉 羊 朱 永 占 王 安 东南 苟 寺 玄 豪 文 安 羊 黒 安 和 中 生 仔 仔
記仁	泉一	芦顯	券 童	周謙	辛一	李応仲		李農仔	李 農 仔 児	李 李 孝 豊 苟 児	李 李 等 呉 農 荀 天 良 仔 児	李 李 字 呉 伯 農 荀 天 良 清 仔 児	李 李 李 呉 伯 江 農 荀 天 良 勗 一 仔 児	李 李 李 呉 伯 江 仲 農 荀 天 良 勗 一 只 仔 児	李 李 呉 伯 江 仲 占 農 荀 天 良 勗 一 只 再 仔 児	李 李 李 呉 伯 江 仲 占 王 農 荀 天 良 勗 一 只 再 黑 仔 児	李 李 李 呉 伯 江 仲 占 王 王 農 荀 天 良 勗 一 只 再 黑 忍 仔 児	李 李 李 呉 伯 江 仲 占 王 王 文 農 荀 天 良 勗 一 只 再 黒 忍 翁 仔 児
記養	胡弟児	金伏来	林伯	孟文	辛堡。	汪保児		李斌	李 滋 遠	李 李 李 斌 茂 遠	李 李 李 呉 ガ 遠	李 李 吳 何 故 茂 毛 均 狗 遠	李 李 吳 何 江斌 茂 毛 均 狗 貞	李 李 李 呉 何 江 仲 斌 茂 毛 均 狗 貞 庄 遠 受	李 李 李 呉 何 江 仲 占斌 茂 毛 均 狗 貞 庄 毎遠	李 李 李 呉 何 江 仲 占 王斌 茂 毛 均 狗 貞 庄 毎 務 遠 受	李 李 李 呉 何 江 仲 占 王 王斌 茂 毛 均 狗 貞 庄 毎 務 季 遠 受	李 李 孚 呉 何 江 仲 占 王 王 文斌 茂 毛 均 狗 貞 庄 毎 務 季 得遠 受
彦 四	胡南三	金福来。	林伯福	孟尹	8周七如	汪春保		李添右	李 李 寅 右	李 李 寅 伯 清	李 李 李 呉 添 寅 伯 是 右 仔 清 一	李 李 吳 余 添 寅 伯 是 安 右 仔 清 一 定	李 李 呉 余 江	李 李 呉 余 江 仲 添 寅 伯 是 安 万 免 右 仔 清 一 定 里	李 李 李 呉 余 江 仲 史 添 寅 伯 是 安 万 免 衍 右 仔 清 一 定 里	李 李 母 会 江 仲 史 王 添 寅 伯 是 安 万 免 衍 喜 右 仔 清 一 定 里 里 仲	李 李 母 会 江 仲 史 王 王 添 寅 伯 是 安 万 免 衍 喜 保 右 仔 清 一 定 里 中	李 李 學 吳 余 江 仲 史 王 王 方 添 寅 伯 是 安 万 免 衍 喜 保 子 右 仔 清 一 定 里 里 仲 華
10 原 佐	昭孫	9 侯暹	林伯権	孟怰	周 子 義	汪添得	3	李添得	李 李 啓 二	李 李 李 答	李 李 李 呉 添 啓 石 保 得 二 保	李 李	李 李	李 李 孝 呉 余 江 任 添 啓 谷 通 興 徳 保 得 二 保 孫 同	李 李 李 呉 余 江 任 甘 添 啓 谷 通 興 徳 保 奉 得 二 保 孫 同 一	李 李 李 呉 余 江 任 甘 王 添 啓 谷 通 興 徳 保 奉 敬 得 二 保 孫 同 一 遠	李 李 李 吳 公 江 任 甘 王 王 添 內 谷 通 田 一 遠 保 得 二 保 孫 同 一 遠 保	李 李 李 呉 余 江 任 甘 王 王 方 添 啓 谷 通 興 徳 保 奉 敬 春 祀 得 二 保 孫 同 一 遠 保 生
唐六	范皋	思敬	林受	孟起宗	周奇生	沈新		李諒一	李 保 四	李 李 李 諒 保 受 一 四 理	李 李 李 呂 諒 保 受 名 一 四 理	李 李 李 B B 京 保 受 A 三 一 四 理 祖	李 李 李 B B E </td <td>李 李 孝 呂 呉 羊 任 諒 保 受 名 三 今 得 一 四 理 祖 保 同</td> <td>李 李 李 呂 呉 羊 任 田 諒 保 受 名 三 今 得 奴 一 四 理 祖 保 同</td> <td>李 李 李 呂 呉 羊 任 田 王 諒 保 受 名 三 今 得 奴 貴 一 四 理 祖 保 同</td> <td>李 李 李 呂 呉 羊 任 田 王 王 諒 保 受 名 三 今 得 奴 貴 眞 一 四 理 祖 保 同</td> <td>李 李 呂 呉 羊 任 田 王 王 王 訪 保 受 名 三 今 得 奴 貴 眞 己 一 四 理 祖 保 同</td>	李 李 孝 呂 呉 羊 任 諒 保 受 名 三 今 得 一 四 理 祖 保 同	李 李 李 呂 呉 羊 任 田 諒 保 受 名 三 今 得 奴 一 四 理 祖 保 同	李 李 李 呂 呉 羊 任 田 王 諒 保 受 名 三 今 得 奴 貴 一 四 理 祖 保 同	李 李 李 呂 呉 羊 任 田 王 王 諒 保 受 名 三 今 得 奴 貴 眞 一 四 理 祖 保 同	李 李 呂 呉 羊 任 田 王 王 王 訪 保 受 名 三 今 得 奴 貴 眞 己 一 四 理 祖 保 同
千字文异	謝友二。	鄭孟俚	蔡義	劉孟存	劉生	雍子容		万爵三	万 楊 孫 仔	万 楊 黄 爵 孫 足 三 仔	万 楊 黄 僧 爵 孫 足 秀 三 仔 方	万 楊 黄 僧 喩 爵 孫 足 秀 待 三 仔 方 名	万 楊 黄 僧 喩 陳 爵 孫 足 秀 待 細 三 仔 方 名 孫	万 楊 黄 僧 喩 陳 陳 爵 孫 足 秀 待 細 本 三 仔 方 名 孫 立	万 楊 黄 僧 喩 陳 陳 郭 爵 孫 足 秀 待 細 本 雪 三 仔 方 名 孫 立 良	万 楊 黄 僧 喩 陳 陳 郭 張 爵 孫 足 秀 待 細 本 雪 童 三 仔 方 名 孫 立 良 慶	万 楊 黄 僧 喩 陳 陳 郭 張 婁 爵 孫 足 秀 待 細 本 雪 童 道 三 仔 方 名 孫 立 良 慶 明	万 楊 黄 僧 喻 陳 陳 郭 張 婁 祝 爵 孫 足 秀 待 細 本 雪 童 道 佐 三 仔 方 名 孫 立 良 慶 明
千字文号が刻され	謝友二18瞿関保	鄭孟俚 鄭妹児	蔡義 鄧仁	劉孟存 劉真	劉生劉志忠	雷伴二				三仔	三 仔 方	三 仔 方 名	三 仔 方 名 孫	三 仔 方 名 孫 立	三 仔 方 名 孫 立 良	三 仔 方 名 孫 立 良 慶	三 仔 方 名 孫 立 良 慶 明	三 仔 方 名 孫 立 良 慶 明
千字文号が刻されるからす		俚 鄭妹児 鄭雲良					17.71	葉益	葉 楊 益 国 礼	三、養益、養人、養養、養養、養養、養養、養養、養養、養養、養養、養養、養養、養養、養養、	三 葉益葉益葉ム黄森黄保黄保	名 喻待鳴 彭玄達方 曽林仔 童七方 曽林仔 童七方 曽林仔 童七	孫 陳声 陶升同名 喻待鳴 彭玄達好 黄森 黄保黄 黄子黄 黄子黄 黄子黄 黄子黄 黄子黄 十二黄 十二黄 十二一 東 中一 東 中中 中中中 中中 中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中中<td>立 陳汝林 陳光 名 喻待鳴 彭玄達 孫 陳声 陶升同 音林仔 童七 黄森 黄保</td><td>良 郭景生 郭真立 陳汝林 陳光名 喻待鳴 彭玄達子 曾林仔 童七黄森 黄保黄森 黄保黄森 黄保</td><td>E 張貴孫 度 張貴孫 京 陳汝林 東次林 陳光 名 職待鳴 彭玄達 一 村田 大 大 大 大 市 大 市 大 市 大 市 市 市 大 市 大 市 市 市 大 市 市 市 大 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 <</td><td>E 接 E 長</td><td>三 任 方 自 班 社 社 表 明 康敬一 根 表 表 股</td>	立 陳汝林 陳光 名 喻待鳴 彭玄達 孫 陳声 陶升同 音林仔 童七 黄森 黄保	良 郭景生 郭真立 陳汝林 陳光名 喻待鳴 彭玄達子 曾林仔 童七黄森 黄保黄森 黄保黄森 黄保	E 張貴孫 度 張貴孫 京 陳汝林 東次林 陳光 名 職待鳴 彭玄達 一 村田 大 大 大 大 市 大 市 大 市 大 市 市 市 大 市 大 市 市 市 大 市 市 市 大 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 市 <	E 接 E 長	三 任 方 自 班 社 社 表 明 康敬一 根 表 表 股
千字文号が刻されるから大蔵経の		俚 鄭妹児	鄧仁	劉真	劉志忠	雷伴二14	34	葉益、葉具	葉	三葉益 葉異 子 黄森 黄保 13	三 葉益葉 葉 葉 葉 葉 葉 ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま	名 喻待鳴 彭玄達方 曽林仔 童七方 曽林仔 童七方 曽林仔 童七	孫 陳声 陶升同名 喻待鳴 彭玄達好 黄森 黄保黄 横 黄 保横 国礼 楊清長 養益 葉具	立 陳汝林 陳光名 喻待鳴 彭玄達孫 陳声 陶升同立 陳汝林 陳光有 以	良 郭景生 郭真立 陳汝林 陳芳名 喻待鳴 彭玄達子 曽林仔 童七黄森 黄保黄森 黄保黄森 黄保	E () (() () () () () () () () () () () () () () () ()) ()) ()) ()) ()) ()) ()) ()) ()) ()	E 供 E 要 E 長 E 要	三 任 方 食 張貴孫 皮 郭景生 京 東次林 京 東次林 京 東次林 京 東次 会 職件 市 東次 市 東次 市 東次 東 東 京 東
千字文号が刻されるから大蔵経の一部であり		俚 鄭妹児 鄭雲良	鄧仁 鄧仕 鄧伏	劉真 劉従受 劉勝	劉志忠 劉季生	雷伴二 11廖玉宋 趙保 趙阿添	等 <u>分</u> 等 男	芙 金 · 芙 里 · 夏 号	葉益 葉単、 鬂場楊国礼 楊清 楊蒲仔	三、達益、養果、養界子の一、養益、養子、養保、3楊丑俚、黄森、黄保、3楊丑俚	三、 葉金 葉果 實界 方 曽林仔 童七 陽始仔 方 曽林仔 童七 陽始仔	三 葉益 葉果 葉果 葉界 石 輸待鳴 彭玄達 彭暉 方 曽林仔 童七 陽始仔 方 楊国礼 楊清 楊清子 付 楊国礼 楊清子 楊清子 日 東京 東界 東界 日 東京 東界 東界 日 東京 東京 東界 日 東京 東京 東界 日 東京 東京 東京 日 東京	孫 陳声 陶升同 陸晏 名 喻待鳴 彭玄達 彭暉 方 曽林仔 童七 陽始仔 黄森 黄保 3楊丑俚 付 楊国礼 楊清 楊蒲仔	立 陳汝林 陳光 陳厚立 陳汝林 陳光 陳厚 名 喻待鳴 彭玄達 彭暉 子 曾林仔 童七 陽始仔 黄森 黄保 13楊丑俚 居	民 郭景生 郭真 郭厚 立 陳汝林 陳光 陳厚 玄 職待鳴 彭玄達 彭暉 方 曽林仔 童七 陽始仔 黄森 黄保 13楊丑俚 传楊国礼 楊清子 楊清子 長品 東県 東県 東公 東県 東県 京 東県 東県 <td>慶 張貴孫 凌受 凌受一良 郭景生 郭真 郭暉 良 郭景生 郭真 郭暉 克 喻待鳴 彭玄達 彭暉 名 喻待鳴 彭玄達 彭暉 一</td> <td>明 康敬一 張伯楊 張彦直</td> <td>田 祖述 祝景清 衰受明 康敬一 張伯楊 張彦直明 康敬一 張伯楊 張彦直郎 東汝林 陳光 陳厚立 陳汝林 陳光 陳厚</td>	慶 張貴孫 凌受 凌受一良 郭景生 郭真 郭暉 良 郭景生 郭真 郭暉 克 喻待鳴 彭玄達 彭暉 名 喻待鳴 彭玄達 彭暉 一	明 康敬一 張伯楊 張彦直	田 祖述 祝景清 衰受明 康敬一 張伯楊 張彦直明 康敬一 張伯楊 張彦直郎 東汝林 陳光 陳厚立 陳汝林 陳光 陳厚
千字文号が刻されるから大蔵経の一部であり、その第五一〇		俚鄭妹児鄭雲良1億→芦	鄧仁 鄧仕 鄧伏一 鄧曲	劉真 劉従受 劉勝戸	劉志忠 劉季生 劉季真 劉尚	雷伴二 11廖玉荣 趙保 趙阿	万爵三 葉益 葉興 虞得 虞義 虞曽		楊国礼 楊清 楊蒲仔 楊	仔楊国礼楊清 楊蒲仔楊関黄森 黄保 3楊丑俚楊仲森	仔 楊国礼 楊清 楊蒲仔 楊関 黄森 黄保 3楊丑俚 楊仲森方 曽林仔 童七 陽始仔 馮左保	仔楊国礼楊清楊蒲仔楊関方曾林仔童七陽始仔馮左保名職待鳴彭玄達彭暉景生	仔楊国礼楊清仔楊萬子楊萬子楊萬子楊其子方曾林仔童七陽始仔馮左保五一一一一一上五一一一一上上五一一一上上 <td>仔 楊国礼 楊清 楊浦仔 楊関 立 陳汝林 陳光 陳厚 陳海 古 職待鳴 彭玄達 彭暉 景生 孫 陳声 陶升同 陸晏 陸喜 孫 陳声 陶升同 陸晏 陸喜 孫 陳声 陶升同 陸晏 陸喜 本 職待鳴 彭玄達 彭暉 景生 基本 基本 <tr< td=""><td>仔 楊国礼 楊清子 楊開子 楊門 日本 日本</td><td>仔 楊国礼 楊清子 楊開子 点 郭景生 郭真 郭暉 陳七 点 郭景生 郭真 郭暉 陳七 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 陳海 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 陳海 基森 黄保 13楊丑俚 楊仲森 付 楊国礼 楊清子 楊清子 楊傳子</td><td>仔 楊国礼 楊清子 楊開子 日 郭景生 郭真 郭暉 陳之 京 陳方 陳之 陳之 東京 東京 京 陳方 陳本 東京 東京</td><td>仔 楊国礼 楊清子 楊國人 日 東京 東京 東京 東京 良 郭景生 郭真 郭暉 東之 良 郭景生 郭真 郭暉 東之 会 藤青 岡升同 陸喜 陸喜 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 康本 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 康本 名 職待鳴 夢玄達 藤喜 基本 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京</td></tr<></td>	仔 楊国礼 楊清 楊浦仔 楊関 立 陳汝林 陳光 陳厚 陳海 古 職待鳴 彭玄達 彭暉 景生 孫 陳声 陶升同 陸晏 陸喜 孫 陳声 陶升同 陸晏 陸喜 孫 陳声 陶升同 陸晏 陸喜 本 職待鳴 彭玄達 彭暉 景生 基本 基本 <tr< td=""><td>仔 楊国礼 楊清子 楊開子 楊門 日本 日本</td><td>仔 楊国礼 楊清子 楊開子 点 郭景生 郭真 郭暉 陳七 点 郭景生 郭真 郭暉 陳七 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 陳海 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 陳海 基森 黄保 13楊丑俚 楊仲森 付 楊国礼 楊清子 楊清子 楊傳子</td><td>仔 楊国礼 楊清子 楊開子 日 郭景生 郭真 郭暉 陳之 京 陳方 陳之 陳之 東京 東京 京 陳方 陳本 東京 東京</td><td>仔 楊国礼 楊清子 楊國人 日 東京 東京 東京 東京 良 郭景生 郭真 郭暉 東之 良 郭景生 郭真 郭暉 東之 会 藤青 岡升同 陸喜 陸喜 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 康本 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 康本 名 職待鳴 夢玄達 藤喜 基本 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京</td></tr<>	仔 楊国礼 楊清子 楊開子 楊門 日本 日本	仔 楊国礼 楊清子 楊開子 点 郭景生 郭真 郭暉 陳七 点 郭景生 郭真 郭暉 陳七 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 陳海 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 陳海 基森 黄保 13楊丑俚 楊仲森 付 楊国礼 楊清子 楊清子 楊傳子	仔 楊国礼 楊清子 楊開子 日 郭景生 郭真 郭暉 陳之 京 陳方 陳之 陳之 東京 東京 京 陳方 陳本 東京 東京	仔 楊国礼 楊清子 楊國人 日 東京 東京 東京 東京 良 郭景生 郭真 郭暉 東之 良 郭景生 郭真 郭暉 東之 会 藤青 岡升同 陸喜 陸喜 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 康本 名 職待鳴 彭玄達 彭暉 康本 名 職待鳴 夢玄達 藤喜 基本 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 場所子 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京 東京

名を手がかりに考えることになる。思われるが、宋代以来の印刷大蔵経のどれのものか、この刻工番の轂から五一六番の富までで、後半の史伝部に属するものと

明洪武五年(一三七二)刊の元史、宋刊の南北朝七史や元大徳 多く伝来している宋元の大蔵経にはあまり見られない名が大半 録 \mathcal{H} る (「五〇頁)。このうちに主に元末に近いと思われる 王保 の明初覆刻本の刻工と、三〇名ほどが共通することを指摘され 公文章正宗、古史、唐分粋、九路本南北史・隋書と元刊金元史 九路儒学刊十史等の元末修葉、そして明初刊の西山先生真文忠 が明の南蔵であるらしいことを教えられた。氏は元後至元三年 史学的基礎研究—」(汲古書院 い当ったのであるが、 であるが、野沢佳美氏の近著「明代大蔵経史の研究-南蔵の歴 一三三七)序刊の慈溪黄氏日抄分類と古今紀要、泰定元年 等の名が含まれるのである。この書を恵与されて、これと思 一三四 この表は次の有宋高僧伝との双方を含めてあり、 孟起宗 徐成 陳七 陳文 陳厚 黄保 楊成 (同館編)と氏の解説の「刻工者」によって、 刊後至元五年(一三三九)修の文献通考(前掲)、 更めて「立正大学図書館所蔵明代南蔵目 一九九八年)によって、これ 楊保 潘晋 薛志良 この両高僧伝 わが国に数 呉

には原本によって確認したいと考えている。がこの千字文号で入蔵されているかと刻工名とについて、さら

の刻工による経巻は氏の所説の通り南蔵本であろうと思われる。南蔵はその後に焼失し、永楽中に再刻されたとされるが、こ

一年(一三七二~九八)金陵蒋山寺刊南蔵本〕 一〇冊有宋高僧伝三〇巻 宋釈賛寧等奉勅撰 〔明洪武五~三

続高僧伝と同じく後補紺色表紙(三三・六×三〇・六チン)、

包背装。

賜紫賛寧/(同)左街相国寺講経論徳賜紫智輪/(同)同奉/(同)本文主題「有宋高僧伝巻第一/(低四格) 左街大寿寺通慧大師進高僧伝表、有宋高僧伝序ともに端拱元年僧賛寧撰。

勅撰/(低五格) 訳経篇等一之一附見一人」。

のものと一括してある。それぞれ一〇巻ずつとなっている。刻工名は前掲の続宋高僧伝版式も続高僧伝とまったく同じく、千字文号は 禄 侈 富 で、

折疑論(首尾欠) 元釈子成撰 釈洪智述注 〔明初〕

刊

— 册

後補濃紫色絹表紙(三〇・六×一七・八チン)、金鑲玉装 (料

紙高さ二七・ニチン)。

首三葉半欠、第四葉裏四行まで序らしく、「時辛卯中秋八日

謂折猶予不決之謂疑評議難辨之謂論」と註記する。 書」で終る。その次行(第五行)に首題「折疑論 金台大慈恩 寺 (『格) 西域師子比丘述註」があり、その次行に「曲而断之

双行三二~三五字。版心 白口、単黒魚尾、題「折疑」。 双辺(二〇・二×一四サン)。九行、一九~二〇字・注文小字

一部に主句点、行間に校字を書入れる。また朱筆で「達麽九

年不語顔回終日如愚」の一行。

「会名第二十」の第四葉表まで、全巻で第六二葉表まで存し、

以下を欠く。

太上老子道德経四巻 旧題漢河上公章句 (明)刊 四冊

後補暗藍色表紙(二六・四×一五・九チン)、金鑲玉装 (料紙

高さ二三・五チン)。

老子道徳経太極左仙公葛玄序、老子聖紀図、混元三宝之図

初真内観靜定之図、金円之図

本文首題「太上老子道経卷上/(低八格) 無垢子何道全述註」。

行。版心 双辺(一九・三×一二・四チン)。八行、一七字・注文小字双 粗黒口、双黒魚尾、題「道徳上(下)」。

墨筆で句点、傍点、眉上に校語を書入れる。

補写が巻上第七・八葉。

巻二以下の首尾題は「太上老子道経上巻之二」(巻二首尾)、

「太上老子徳経巻之下」「太上老子徳経下巻之三」(巻三首尾)、

「太上老子徳経下巻之四下」「太上老子徳経下巻之四終」(巻四首

尾)。

巻末に聶富の重刊道徳経後序がある。

鄭重明」の蔵印

沖虚至徳真経八巻 晋張湛注 唐殷敬順釈文 〔明前期

建安〕覆元刊六子全書本

四冊

後補香色表紙(二八×一六・五ザン)、金鑲玉装(料紙高さ二

三・六ヂ)。水色地単郭題簽を貼るが、題は未記入。

張湛の列子序、そして沖虚真経目録。

本文巻首「沖虚至徳真経巻第一/(三格) 列子 (隔八格) 張湛処

度注」。

双辺(一七・五×一一・四ザ)。一一行、二一字・注文小字

双行。 版心 粗黒口、 双黒魚尾、 題「列子幾巻(フ)」。

部に朱句点。

盋山書影、嘉業棠善本書影、旧京書影555所掲本と同版。 中

国訪書志五四〇頁を参照。

·嘉業/堂」(劉承幹 一八八一~一九六二)、「張印/百熙」(陰) 蔵印は嘉業堂印のほかは未詳。「劉印/承幹」(陰)「翰/怡」

華墅主人珍蔵」、「大学/生章」「梁国/□印」(儵)「詩書/□印-「張百熙/長爵年/图子孫」(陰)「長/叔平」「長沙□山張氏梅

集 部

李翰林集三〇巻 唐李白撰 (明) 刊

二冊

後補暗藍色表紙(二八・八×一七・四チン)、金鑲玉装(料紙

高さ二六・六ゼン)。

華の撰。 の李翰林集序が改丁せずに続く。故翰林学士李君墓誌並序は李 序、宋咸平元年楽史の李翰林別集序、魏題の李翰林集序、 宋咸淳己巳(五年)涅万里の序。唐宝応元年李陽冰の草堂集 唐故翰林学士李君喝記は劉全白等の撰

本文巻首「李翰林集巻第一/(低七格)翰林供奉李白」。

単辺(一七・九×一三・一チン)。一〇行、二〇字・注小字双

行。版心 白口、魚尾がなく横線で三格に区切る。題もなく中

段に「巻幾」、下段に丁付。

墨釘の箇所がある。

目録は咸淳己巳(一二六九)刻本と、カードに咸淳刻本、ま 「李翰林集巻第三十」の尾題の後に、新唐書本伝

た明正徳八年鮑松覆宋刻本と著録される。

蔵印の「宝綸/堂書/画図記」(像)は斉召南(一七〇三~六

八)か。他も未詳の「劉印/道開」「古羊劉/氏惟吉」(陰)「劉

書」「賞心/楽事」「子孫□/華卿」。

分類補注李太白詩二五卷 唐李白撰 宋楊斉賢注 元粛

士贇補注 〔明〕覆元至大三年余氏勤有堂刊本

後補薄青色表紙(二四・九×一五・ーヂ))。

「分類補註李太白詩巻之一/(低七格) 春陵楊 斉賢

註/(同) 章貢蕭 士贇 粹可 補註」。

単辺(一九・三×一二・五サン)。一二行、二〇字・注文小字

双行二六字。版心(白口、魚尾がなく、横線で四格に区切り、

第二段に題「李詩註巻幾」、三段に丁付を刻する。

か。台北故宮博物院蔵本も同じ。一部に朱句点。巻二五の第二〇葉が欠け、二二葉で終るが、以下わずかに欠

くなく、粗雑というべく、覆刻本をさらに覆刻したものであろ三三頁下段)。この至大三年刊本の覆刻であろうが、字様は良とある。故宮本は匡郭だけを存して文字がない(中国訪書志一目録末に双辺双行の木記があって、「至大辛亥/三月刻」

7/虖」(m)。所有者未詳。 蔵印は「甫/皇」「此扇/以好不/以新」(m)「不知/其人

う。

可

同 〔明前期〕刊

二〇冊

高さ二五・二チン)。

後補明藍色表紙(二六・五×一五・七サン)、襯装。

本文巻首「分類補註李太白詩巻之一/(低二一格)春陵楊 斉至元二八年蕭士贇の新刊李太白詩序、分類補註李太白詩目録。

賢子見、集註/(同) 章貢蕭・士贇(粹可)補註」。

版心 粗黒口、双黒魚尾、題「李太白詩幾巻」。 双辺(一九・三×一二・八チン)。一一行、二三字・注文双行。

墨筆で句点、圏点が一部に施される。

巻二五は尾題を欠く。

業堂蔵」(劉承幹 一八八一~一九六三)、「コ石/山人」「望徴」伯」(張乃熊 光緒三一年貢生 鈞衡の長子)、「呉興劉氏/嘉蔵印は「張万/善印」(陰)(明人か)、「張/乃熊」(陰)「芹/

(角)。

集千家註分類杜工部詩集二五巻文集二巻 唐杜甫撰

宋徐居仁編 黄鶴補注 詩集 〔元至正八年(一三

四八)広勤書堂〕刊 文集

〔明初〕刊

後補乳白色表紙(二八・九×一八・一チン)、金鑲玉装(料紙

集千家註分類杜工部詩目録、この末に台北故宮博物院蔵本は

刊記が剜去されてあるというが(中国訪書志二七二頁)、ここ

にはその痕跡もない。集註杜工部詩姓氏。

本文巻首「集千家註分類杜工部詩集巻之一/(低七格) 東萊

徐居仁編次/(同)臨川 黄鶴補註」。

双行。版心・小黒口、双黒魚尾、題「杜詩註巻幾」。 双辺(一九・八×一二・七ギン)。一二行、二〇字・注文小字

二四冊

四行半のところで切断され、鍾・鑪式の木記がない。杜工部伝 詩門類がここに綴じられているが、第二葉第二行以下が空行で、 後にあるという「壬寅広勤堂」の刊記がない。集千家註杜工部 尾題「集千家註分類杜工部詩巻之二十五」、早印本にはこの

文集の首題は「杜工部文集巻之幾」。

序碑銘も欠く。

詩集とはやや字様が異り、刊刻は明初に降るかと思われる。

蔵印は「呉興劉氏/嘉業堂蔵」。

集千家註批点杜工部詩集二〇巻文集二巻 唐杜甫撰 宋

黄鶴補注 劉辰翁評点 [元末] 刊

高さ二三・四チン)。 後補暗紫色表紙(二七・三×一六・七ザン)、金鑲玉装(料紙

集千家註批点杜工部詩集目録。尾に木記を剜去したらしい跡

が残る。

本文首題「集千家註批点杜工部詩集巻之一(低六格)須 溪 先

生 会孟 評点」。

注文小字双行二五字。版心 小黒口、単黒魚尾は下方だけ、題 左右双辺(二一・二×一三・七ザ)。一四行、二四~二五字・

「杜詩幾」。傍点線、圏点を刻する。

「魯訔曰」「黄鶴曰」等、注に引用の標目は墨囲陰刻。

遺が附く。それぞれに首尾題があるが、「杜詩註一巻補遺」「批 各巻末には、巻五・七~一〇・一四・一八・一九を除いて補

点杜詩註二巻補遺」(尾題)など不定。

巻一八首は改丁せず、巻一七第一八葉裏に首三行を空けただ

けで始る。

巻二〇葉は第一四までで、以下欠。

朱筆で句点・傍点・圏点が打たれる。

詩集が終った後に、劉将孫の序、杜工部年譜。集千家註杜工

部詩集附録として、元稹の唐杜工部墓誌銘、唐文藝伝、王洙の

杜工部詩史旧集序、王琪の増修王原叔編次杜詩後記、王安石の

杜工部詩後集序等が続く。

次で「集千家註批点杜工部文集目録/(低二格)須溪先生劉

会孟 評点」。

本文卷首「杜工部文集巻之一」。

左右双辺(二一・六×一三・六ギ)。一四行、二六字。

中国古籍善本書目に、復旦本は明初刻の存一三巻と明刻の完

ぼ同じくする本が二部あるが、この完本は明というより元末刊

本と見てよかろうと思う。

朱文公校昌黎先生四〇巻外集一〇巻集伝遺文各一巻 唐

韓愈撰 宋朱熹考異 王伯大音釈 明正統一三年(一

四四八)王宗玉覆元至元六年日新書堂刊本 | | | | |

後補香色表紙(二四×一四・ニヂ)、襯装。

晦庵先生朱文公韓文考異序、宝慶三年王伯大序、李漢編の朱

文公校昌黎先生集凡例、朱文公校昌黎先生集目録(李漢編)と

続いて本文

巻首「朱文公校昌黎先生文集巻之一/(版) 晦庵先生校異

(三格) 留畊先生音釈」。

双辺(一九・四×一二・一せ~)。一三行、二三字・注文小字

双行。版心 粗黒口、双黒魚尾、題「昌文幾(フ)」。

注文の首の「集註」「方云」「樊曰」「孫曰」「韓曰」等の標示

は墨囲陰刻。

末巻四〇の尾題が「朱文公昌黎先生文集巻之二十終」と誤刻

されている

次に朱文公校昌黎先生外集目録、そして「朱文公校昌黎先生

外集巻之一」。

更に「朱文公校昌黎先生集伝」、「朱文公校昌黎先生遺文」。

朱句点・圏点・傍点、眉上・行間にも朱筆の書入がある。

蔵印「虞山銭曽/遵王蔵書」(銭曽 一六二九~一七〇一)、

「風山/之漸」「白沙黄/草夢中/人」、「呉興劉氏/嘉業堂蔵

「嘉業/堂」(劉承幹 一八八一~一九六三)。

この本は目録に宋刻本と著録され、中国古籍善本書目では一

本とまったく同版であり、四部叢刊本には門人李漢編・汪季路 三三七番の元刻本がこれに当るかと思われる。しかし四部叢刊

に「戊辰十月吉旦 書林王 宗玉 謹識」とある。その戊辰は 書という朱文公校昌黎先生集序の後に七行の刊記があり、末行

られる。この刊記が削除されたもので、同じ例が台北の中央図 字様、とくに粗黒口の版心の形式などから、明正統一三年とみ

道文庫蔵貴重書蒐選第一二番 書館北平蔵本 (中国訪書志二七五頁)、斯道文庫蔵本 補配本巻一・二)にある。

晦庵先生朱文公文集零本(存巻八七) 宋朱熹撰

(元) 刊 [明] 修

後補暗藍色表紙(二九・一×一七・五チン)、金鑲玉装 **m**

(料紙

高さ二四・九ヂ)。

三格)祭籍溪胡先生文」。 本文首題「晦庵先生朱文公文集巻第八十七/(版)/蔡文/

白口、双黒魚尾、題「朱文公集巻八十七」、上象鼻に字数、下 第一葉は明修で、版心(粗黒口、双黒魚尾。第二葉は原刻で、 左右双辺(二〇・五×一五・三チギ)、一〇行、一八字。この

象鼻に刻工名、古片呂弓等。

すべて宋刊(宋・元・明修)本である。一方、靜嘉堂蔵本(靜 明二〇で、第三二葉は明修も正徳ごろに降りそうである。ただ れと同版であろう。 と認められる。この残一巻には姓名を具す刻工名がないが、こ 志五八〇~一頁)等は元刊とされ、これは刻工名からも正しい 嘉堂文庫宋元版図録)、台北の中央図書館蔵の二部 (中国訪書 館古籍善本書目著録本もこの本と同じ一〇行一八字本が七部. し中国古籍善本書目にはすべて宋刊で元刻本はなく、北京図書 いが、版式・字様から元刊明修とみられ、その割合は元一四、 頁」と墨書されている。中国古籍善本書目には該当する本がな 目録に「宋刻元補本」とあり、巻末に「宋刻十五頁元補十八 尾題は上二字が破損して「____生朱文公文集巻第八十七」。

> |春波沈氏/珍蔵図籍/書画印」、「海日/楼」(陰)「海山/靖盧 、沈曽植 振玉の弟)。 蔵印は「銭唐/沈兆/霖印」(陰)「臣沈兆霖」(陰)(沈兆霖)、 一八五〇~一九二二)、「蟫隠/盧秘/籍印」(羅振常

国朝文類七〇巻 西湖書院刊〔明〕至成化九年逓修 元蘇天錫編 元至正二年(一三四二)

四〇冊

後補香色表紙(二六・九×一八チン)、襯装。

二年王理の国朝文類序、同じく陳旅の序。国朝文類目録が上中 下三巻。その末に「儒士葉森対」と校者名がある。 江浙等処儒学提挙司刊補改正書版下杭州路西湖書院劄子。元統 至大二年准中書省請刻移咨江南行省鋟梓咨文、至正二年二月

沢之 下象鼻に刻工名。明成化修は粗黒口で、そこに「成化九年」 | 吏部重刊」のように陰刻する。刻工名は、了山 林茂実 王仏 線黒口、双黒魚尾、題「国朝文類巻(第)幾、上象鼻に字数、 本文巻首「国朝文類巻第一」。賦、その琴賦から始まる。 左右双辺(二一・八×一四・七ザ)。一〇行、一九字。版心 袁栄 陳栄 中之 右之 古賢 楊景川 遠林 趙明 朱言 煥之 等。 羊子名 子成 呉丑 施

り、刻工も前後して江浙等処儒学と西湖書院が刊修を行った六至正二年に西湖書院で脱漏を補って刊行したことが明らかであ冒頭の咨文と劄子によって、至元中に江浙等処儒学で開版し、

書統溯源や文献通考と共通する。

れより後印であることを示す。明修は両度にわたっている。刻工名が中国訪書志(二九五頁)所掲のものより少いのは、そ原刻葉で刷りの良いものがあれば、漫漶の進んだ葉もある。

巻二第一五葉裏以下、巻三第一葉、巻四五第一八葉は欠葉。

蔵印は「古香/書屋」(安岐 一六八三~?)、「王沅/私印」

黛)「芷橋/氏」(隱)「廉隠/居士」(陰) (王沅)、「太原李子」

円格)。

三蘇先生文集七〇巻 宋蘇洵・蘇軾・蘇轍撰 編者未詳

〔明前期〕刊

一六冊

後補暗藍色表紙(二九・二×一六・八サン)、金鑲玉装(料紙

高さ二五・ニチン)。

三蘇先生文集檁目、老泉先生墓誌銘 欧陽文忠公撰、東坡先

生墓誌銘 潁浜先生撰。

本文巻首「三蘇先生文集巻第一/老泉先生」。老泉先生は一

巻、東坡先生が巻一二から三二巻、潁浜先生が巻四四からの

二七巻で構成される。

黒口、双黒魚尾、題「三蘇文幾」。丁付は数巻数冊を通して打双辺(一九・六×一二・七チン)、一四行、二六字。版心 粗

たれているが、版心部分の破損がひどく詳細不明。

墨釘の箇所が多く、とくに首の墓誌銘は老泉先生に一三、東

坡先生に二一ある。

巻五〇第一葉が欠葉。

墨筆の句点、傍点、眉上の書入れが少からずある。

尾題「三蘇先生文集巻之七十終」。ただし「老泉文抄巻之五

(〜七)」、「三蘇文巻第十一」などもある。

楽府詩集一○○巻 宋郭茂倩編 元至正元年(一三四一)

序刊 [明] 修

二四冊

後補濃紫色表紙(二九・五×一九サド)、襯装。印刷題簽「元

本楽府詩集」、篆書。

と題して作者姓氏、ただし第三葉以下欠。楽府詩集目録上下。至正初周彗孫の序。至元六年李孝光の楽府詩集序。楽府詩集

本文巻首「楽府詩集巻第一/(低六格) 太原 郭 茂倩

編次」。

の修葉に呉丑 王林 舒関。 象鼻に刻工名。刻工は施恵のほか単字で朱 彦 寸 等。粗黒口線黒口、三黒魚尾、題「楽府詩集巻幾」、上象鼻に字数、下左右双辺(二二・五×一四・五ギ)。一一行、二〇字。版心

図書館本(中国訪書志五九六頁)のものより少い。 粗黒口の修葉は全体で一〇葉余で、その刻工名は台北の中央

第一・二、巻九五第五・六、巻九七第七・八葉。五○、巻六七第五~八、巻六八第七、巻六九第一・二、巻七二補写葉が一九葉ある。目録下第七・八・四五・四六・四九・

に文字が補筆されている。 一部に朱筆で句点、圏点、傍線が施され、また墨釘のところ

悔堂蔵本」(楊浚 咸豊二年進士)。一五四四)、「侯官/楊浚」(陰)「内史/之章」「閩楊浚雪滄/冠一五四四)、「侯官/楊浚」(陰)「内史/之章」「閩楊浚雪滄/冠蔵印は、「濮陽李/廷相家/蔵図籍」(明李廷相 一四八一~

又 零本(存巻三九・四〇 有欠葉)〔明〕修 一冊

後補香色表紙(三〇×二八・五チン)、金鑲玉装。

両巻とも首尾完好でなく、巻三九の存葉は第三~六・九~一

三葉(全一三葉)、巻四〇は存一~五・八・一〇・一一葉。

蔵印は「円徒毛氏茹/檗軒秘/笈善本」(陰)「毛/賞」(陰)であるが、版面に割れめがめだち、前掲本より後印である。巻三九第八葉は粗黒口の明修で刻工は舒関。補刻はこれだけ

茹檗/審定」(陰)。

復旦大学図書館では、当時、高橋智氏が留学していた縁で一九八七年初夏以来、同館の善本書目に宋元版と著録されている本の閲覧調査を、格別のご厚意をいただいて、経部・史部と進めた。しかし上海図書館の方に重きを置くなどして中で子部・集部をも拝見し、ここにその結果を報告できるに至ったのである。同様に大学古籍整理研究所長章培恒教授がご高配を賜り、古籍部主任呉格氏がこの上なく便宜を計ってくだ。李慶・邵毅平・三浦理一郎ほかの諸氏の大きな援助もあった。本慶・邵毅平・三浦理一郎ほかの諸氏の大きな援助もあった。本島・邵毅平・三浦理一郎ほかの諸氏の大きな援助もあった。本島・邵毅平・三浦理一郎ほかの諸氏の大きな援助もあった。本島・邵毅平・三浦理一郎ほかの諸氏の大きな援助もあった。本島・邵毅平・三浦理一郎ほかの諸氏の大きな援助もあった。本島・邵毅平・三浦理一郎ほかの諸氏の大きな援助もあった。本島・昭和、当時、高橋智氏が留学していた縁で